

平泉雜記

坤

和書門			
二八二九一	八六	一	二
號	函	架	冊

內閣文庫			
二八二九一	二	一	七
號	冊	架	函

內閣文庫	
番號	和 28291
冊數	2 (2)
函號	175 17

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak 2007 TM: Kodak



平泉雜記卷之六目錄

中興寺銅鏡
神鏡後
新羅金寶鏡
丹輪堂
廣濟水
深島金
金毛
其
三竹
我
寄

興
國
釋
有
九
志
其
成
下
天

平泉雜記卷之三目錄

中尊寺銅鐘一

押領使三

辨鎌倉實記五

耳輪堂七

產湯水九

漆萬盃十二

金色堂三代棺十三

其二十五

三條吉次十七

義經古館十八

常陸坊海尊二十一

奧六郡二

摩多羅神四

國衛塚六

辨慶納大般若經八

常盤之墓十

光堂三代太刀十二

光堂物語十四

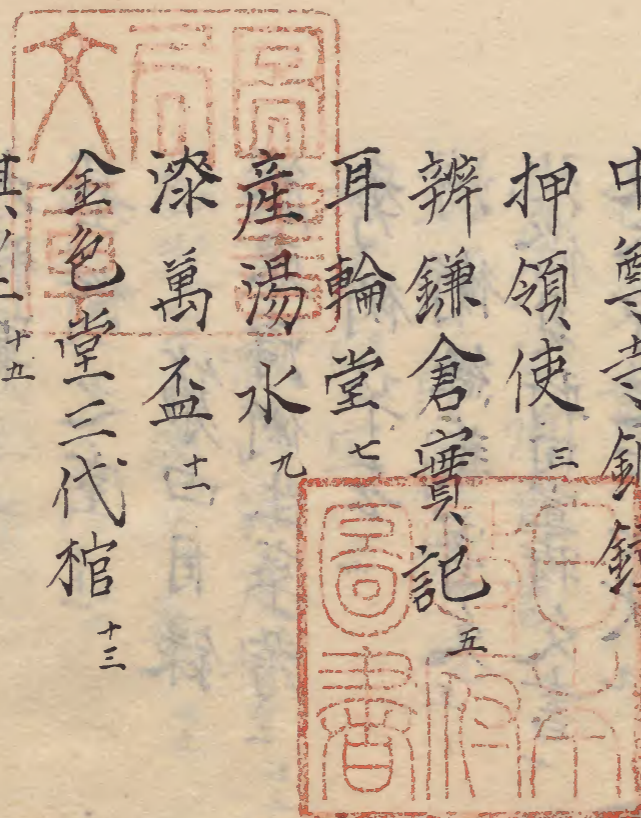
其三十六

炭燒藤太石塔十八

力士之塚二十

家老館二十二

明治十六年謄寫



花楯城 二十三

羽黒山大堂 二十五

北條九代記頼朝奥入 廿七

大將軍 二十九

基衡之室 三十一

藤原清衡生卒考 一

秀衡卒去 三

清衡經藏寄文 五

北條貞時同宣時文書 七

從本寺之下知狀 九

若狹守行重文書 十一

神樂岡 二十四

長命山城 二十六

田村將軍建立堂社 二十八

辨慶石 三十

基衡卒去 二

頼朝卿送秀衡入道書 四

頼朝卿御下文 六

學頭職補任狀 八

北畠顯家卿國宣 十

平泰忠文書 十二

仁木義長文書 十三

古文書 十五

秀次公御定書 十七

朝鮮陣御定 十九

御黒印写 廿一

從東叡山法度條々 廿三

毛越寺々領之事 廿五

毛越寺々院 廿七

恭衡城址 廿九

一野 三十一

秀衡矢立杉 三十三

鬼切部 三十五

越前守親重文書 十四

關白秀次公御朱印 十六

淺野長政文書 十八

中尊寺神事制札 廿

從東叡山之文書 廿二

同書狀 廿四

中尊寺々院 廿六

秀衡古城 廿八

黒岩口 三十

津久毛橋 三十二

千塚 三十四

依藤忠信之鎧 三十六

第四目錄

義經首 三十七

永福寺 三十九

義經辨慶寺之笈 四十一

源義經之容貌 四十三

第五目錄

駒形嶺 一

忠信屋敷 三

南延 五

中尊寺燒杉 七

義經廟上梁文 九

關山中尊寺之號 十一

白山社祭礼式 十三

南部戶頭武國 三十八

平泉圖 四十

牛若殪長範 四十二

源賴朝容貌 四十四

義經之臣 二

橘次井 四

衣川歌 六

白旗大明神 八

中尊平泉之說 十

津輕人魚 十二

農民得金玉 十四

安倍家系 十五

辨慶之氣質 十七

和漢三才圖會之說 十九

塩竈鉄碓 廿一

豊田館 平泉館附 廿五

金史別本之說 廿五

平泉舊跡方角里數 廿七

赤堂跡 廿九

北上川衣川館 三十一

駿河次郎 十六

辨慶筆跡 十八

蝦夷風土考之說 廿

豊田城趾碑 廿二

中尊毛越兩寺之鐘 廿四

貞任宗任力詠 廿六

平泉所々清泉 廿八

圖隆寺燒亡 三十

平泉雜記卷之三

相原友直 著

○中尊寺銅鐘

今中尊寺ニ在所ノ鐘ハ七十九代ノ帝 光明帝ノ御宇
 康永二年癸未ノ歲造リ秀衡時ノ鐘ニアラス此山五十四代
 仁明帝ノ嘉祥三年庚午ノ歲慈覺大師ノ開闢ニシテ其後
 二百五十六年ヲ過テ七十三代堀河帝ノ長治三年乙酉ノ春堀河
 鳥羽兩帝ノ勅詔ヲ蒙リ鎮守府將軍藤原清衡寺院佛像
 ヲ建立ス其後二百三十二年ヲ歷テ建武四年丁丑ノ歲
 堂社寺塔回祿ニテ残レル者少シ此年ヨリ七年後ニ賴榮法師此鐘ヲ鑄テ
 序銘ヲ書リ此人清衡ノ再興造立ノ年曆ヲ去ル事遠カラサルカ故ニ序
 中ニ著ス外ノ山ノ由来是ヲ徵ト為スベシ賴榮ハ金色院ノ先祖ナリト云
 一説ニ西谷坊ノ先祖云此院金色堂ノ別當ニシテ元妻帶ナリシガ延富四年ノ秋時住持清

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

僧寺上為セリ ○鐘序銘

仰考平泉中尊寺草創歲序長治二年春藤原清衡公奉賜堀河鳥羽勅詔靈場也爰建武四年回祿成阿闍塊堙賴榮勵推鐘利王志于茲誌

關山曉鐘 覺無明眼 鷲嶺晚嵐

拂煩惱塵 摧伏魍魎 感降靈仙

悉極六道 下達九泉 斂輪輟若

鯨音無邊 普配聖賢 四化父母

利物心堅 鑄施金錢 銘加錢字

永不朽傳

康永二年 大歲 癸未 七月 日

鑄師散位藤原助信

願主權律師賴榮

大旦那近將監平親家

大旦那當國大將沙弥義慶

鐘長四尺壹寸ホド口ノ徑式尺三寸厚三寸

○奥六郡

奥六郡ト云ハ陸奥州ノ内膳沢江刺和賀稗枝志和岩手ナリ清衡是ヲ領スルコト東鑑卷之九ニ見エタリ膳澤ヲ俗伊沢ニ作ル和賀續日本記ニ和我ニ作ル東鑑ニ加賀ニ作リ拾芥抄ニ知我ニ作リ或ハ知賀ニ作レル者アリ皆誤ナリ江刺東鑑ニ柄著差下書ル処アリ是字假名ヲ以書リ又節用集ニ江差ト書テ江刺ト二郡ト為ス是文字ノ異ナルヲ以誤レリ江刺一郡ト為スベシ拾芥抄ニ誤

江判作ル稗技ヲ枝作ル東鑑ニ誤テ部貫ニ作ル又節用集ニ誤テ稗繼
ト書リ今稗貫ト書ス志和拾芥抄ニ斯波ニ作ル續日本紀ニ子和作ル
源順和名集ニ標葉ニ作ル又紫和ト書ル者アリ岩手或岩提ニ作
ル者アリ○或說ニ東鑑ニ加賀ト書ルハ加美郡ノ誤ナルニシト云リ愚按
スルニ此說誤ナルベシト云リ愚按スルニ此說誤ナリ同書ノ末ニ和賀ノ事
ノ出タルヲ以證トスベシ況ヤ北方岩手ヨリ志和稗貫膽沢江刺六郡
連續ノ中和賀一郡ヲ除テ遙ニ三四日ノ行程ヲ隔タル加美一郡ヲ交
ヘ加フベキニ非ズ此說僻コトナリ○此六郡ハ安陪忠頼以來頼時貞任
マテ傳領シ其後清原真人武則領知シ其子荒川太郎武貞其子
眞衡其養子海道小太郎成衡戰死後清衡領之基衡秀衡泰
衡繼テ領之○東鑑卷之九云清衡繼父荒川太郎武貞卒去後傳
領奥六郡ト然ルニ前太平記等ニ清衡ハ武則ニ養ハレテナリ武貞

ヲ兄ト為スト云リ五代一覽ニ毛兩說ヲ舉テ一ニ不歸又武貞カ子ニアラセ
ト分明ナリ清衡幼キ時武則ニ養ハルト雖モ成長後養父ノ姓ヲ冒
シテ本姓ニ復スルコト明履歷ニアラセハル成衡戰死後奥六郡ハ官地ニ
収メラレ義家將軍執奏ニ依テ清衡ニ禁裏ヨリ下シ賜リタルナリ或
說ニ清原ノ家ヲ繼テ六郡トヲ傳領スルト云ハ誤ナリ

○押領使

押領使ハ國ニ奸盜等ノ人アル時平ケル職ナリトソ○錄倉實記云當時日
本ノ三押領使ハ奥州ノ秀衡一伊豆ノ祐親一肥後ノ菊地ナリ
一國ノ政務ハ國司ノ主ル所ナリ若兵馬ノ事ハ國司ノ尋ルニ不及押領
使ノ意ノマニ振廻ナリ今度翔落ノ法師ナド探ス事ハ小事ナリ目
代ノ役ナリ○朝野群載ニ押領使ノ大政官符アリ尤載テ考備フ
大政官符

出雲國司

大政 應以清瀧靜平為押領使令追捕部內奸盜輩事
右得彼國去正月廿六日解狀稱謹檢案內美作伯耆等國申請
官等押領使勤行警固而此國在二境之中暴惡之輩恣心橫行
自非官符之使何能執惡之徒加以年來之間賦稅之民恣心集
黨類動奪人物按事情糾捕之道尤在此使方今靜平才
備亦堪武藝清廣之性勤公在心望請官裁準件等國例
以靜平致裁口押領使且令折凶惡之輩且令在平善之風者
右大臣宣依請者國宜兼知依宣行之符致奉行

從四位下行九中辨橘朝臣好古大史出雲宿祢蔭時
可成談之押領使ト云フ俗云押領ト云詞其地ヲ勅賜ナリテ
押シテ領セル人ナリト解スルハ誤ナリサハ何トテ使ノ字付タル奥羽軍記ノ
和文ニ陣頭ト有リ漢文ニ押領使ト有國々ヨリ公役ニ出ル軍兵ヲ召

連テ出ル將ノ事ナリ押ノ字ノ意ハカミル事ナリ

○摩多羅神 或書ニ斑神ト書ルハ誤リナルベシ

或人問摩多羅神平泉鎮守ナリ是何ノ神ナルヤト答羅山翁ノ
神社考ヲ讀テ其由来ヲ知ル神社考ニ山家要略ヲ援曰傳教大
師佛法ヲ求ント思ノ願アリテ葛城ノ神ニ詣テ祈リケルニ神傳教大
師ニ告タマハク是大願ニシテ我がチカラ及ハサル処ナリ天神地祇ヲ
祈ルニ但シ三輪大神ハ我國ノ地主ニシテ天竺唐土モ亦此神ヲ崇ムカ
シニ詣テハ祈ルベシト告タマフ其後傳教大師叡山ニ歸レリ山ニ
三光ノ光ヲ認ルル処アリ行テ是ヲミレバ枚ノ大樹ナリ其後入唐ノ
志ヲ遂ゲ唐土天台山青龍寺ニ至ル其鎮守ヲ摩多羅神ト云
又金毘羅神トモ云リ大師此神ハ何レノ神ナル事ヲ尋ヌレバ三輪
金光ト申奉ル神ナリト答テ於是大師初メ日本ニ在リ日ノ叡山ノ三

光ハ此摩多羅神ナルヲサトリ又求法ノ願成就シ日本帰國ノ後
叡山ノ三光ノ所ニ神社ヲ建ツ是則チ日吉大宮ナリ昔靈鷲山於
テ十二神ヲ祭タマフ其中ニ金毘羅神アリ是乃チ我朝ノ三輪大明
神ナリ弘法大師上下ノ醍醐ニ建立スル清瀧明神慈覺大師西坂
ニ立ル赤山旌現智證大師三井寺ニ建ル新羅明神何モ入唐ノ
時所ル処ノ天台山青龍寺ノ鎮守ニシテ乃チ素盞鳴尊ノ父子ノ
御神ナリト云リ詳ナル事ハ神社考ニ出タリ

○辨鎌倉實記

近世梓行ノ鎌倉實記ニ日本ノ源義行ト云者金國ノ渡リ
タルト云説金史別本ニアルヲ以テ是ヲ牽合セシガ為ニ許多ク偽言
ヲ設ク今金史ノ文ヲ國字ト為シ凡ニ載テ示之於童蒙審十
ルコトハ本書ニ於テ可考之ナリ又正史ニ齟齬シテ紫朱ヲ混亂

スル者ヲ辨シテ之ヲ後ニ附ス

金史列將傳曰範車國ノ大將軍源^光録義鎮ト云ル人ハ父ハ景陸華
仙ト云所ノ權冠者義行ト云シ人ナリ義鎮始メ新隸鞞部ニテ千戸
邦判事ノ官ニシテ身ノ長六尺七寸ムレツキ温和ニシテ勇猛ニ
才思諸部ニ申タリ外夷ヲ多ク隨ヘタリ梓シテ学館ニ入り礼儀ヲ
辨ス後咸京録事ノ官ニ遷ル金ノ二代目章宗^{日本後鳥羽院文治四年ノ頃章宗元年也}詔シ
テ光録大夫ノ官ト為シ大將軍ニ任ス範車城ヲ守護シ北方諸國
ノ押ヘトナル義鎮カ父權冠者義行ハ昔章宗ノ恩顧ヲ蒙ル總
軍曹事ノ官トナレ北嶺ニ入ラシム日數ヲ不歴シテ十餘敵ヲ破
リ印府ヲ得テ都ニ歸リ幕下ニ屬ス範車城ヲ築テ守護ス其頃
北天竺セメイリ龍海ヲ口タリテ一ツノ嶋ニ至ル山河奇麗ニシテ
悉ク金玉ナリ其所ノ人ハ靈草ヲ剪シテ飲物トシ五穀ヲバ多ク食

スルコト無シ生類ヲ殺シ食物トナスコトヲ甚嫌^キエリ故ニ人正直ニ
テ邪煩ナシ此島ニ伊香保ノ行辰ト云ル老仙人アリ本命ノ法ヲ行
フ容貌常ノ人ニシテ異恠アルコト無シ徳ハ古人ニマサレリ義行
此人ニ帰依シ尊敬シテ長命ヲ得タリ其後唐土ニ往來シテ
或ハアラハレ或ハ隠レテ定ルコトナシ

愚按スルニ鎌倉實記ノ作者右ノ金史ニ出タル義行ノ名義
經ヲ牽合センガ為ニ本文ニ秀衡ノ異見ヲ書シ義行ノ名ハ毛
義經ノ訓後京極良経ニ同ヲ以コレヲイフテ頼朝勳氣ノ後鎌
倉ニテ名付タルヲ秀衡ガ名付タルヤウニ云紛^キラシ唐土マテモ
義行ト名乗ルト云基本ヲ決定シコレニ細註ヲ加テ以コレヲ潤色ス
又評論ヲ書シテ右ノ一條ハ雜記小説ニ依テ記スル故ニ信用為シ
難シト云リ是は何ノ言ゾヤ信用為シ難事ヲ與キテ人ヲ惑ハサ

シムルコト如是雜記小説ヨリトルト云ハ高館没落ノ時此ノ出タルト云一條ノ事ナリ且勳功記ヲ評シテ勳功

記ニ義經蝦夷ニ浴タルト云ヨリハ事實鎌倉實記ノ事實ヲ指ス大ニ異ナリナド

ト云トイエドモ他ヨリ見ルハ畢竟勳功記ト同日ノ談ナルベシ金

史別本ニ義行ト云者仙人トナリタルヤウニ書シモ亦好事ノ者ノ傳

聞シテ是ヲ書シ筆記セシ者ナラシカ日東ノ陸華仙ト云ルハ日

本ノ陸奥氣仙郡事ト云ルニヤ又栗原郡ノ華山ヲ云ルヤ又陸

華山ト云ル處往昔アリケルニヤイマダコレアルコトヲ聞ズ又義行

ト云者金國へ渡リタルト云ハ虚説ニモアラザラシカ義經ノ事ナリト

云ハ理ニ於テ不當夫義經ハ智謀武勇他ニ耻ルコト無キ猛將ナルコト

ハ人ノア解^ア知ル處ナリ平家追討中我カ意ニ合事ハタトヒ頼朝ノ

下知タリト雖トモ不昔^カ之況ヤ諸士ノ異見ニ從ンヤ已カ智略ヲモツラニ

シテ遂ニ蓋^カ世ノ功ヲ成セリ是以推ス時ハ義經實ニ金國へ遁レタ

リト鎌倉ニ何ノ慕^シシキ事有テ外國ニ在テ義行ト名^ララシヤ^モ磨義
経ホドノ勇猛ノ人ニアラストモ敵對セシ方テ改メ呼ル名ヲ用シヤ
平家追伐ノ中鎌倉ヨリノ下知ヲ用ヒズ諸士ノ異見ヲ不聞^ク以人ニ
不降ノ氣象ヲ可見秀衡ノ異見ニ從テ志ヲ改メ頼朝ノ機嫌ヲ
伺フ為ニ義行ト名^ララバ日本ニ住ヌル中コソ尤モアルベキニ異國ニ涉
リテ後頼朝ニ何ノ用カアラシヤ是金ノ源義行ハ陸華仙ノ義行
ニシテ源義経ニハアラサルコト辨ヲ不待シテ分明ナリ鎌倉實記
ノ作者偶金史別本ノ事ノ似タルヲ見出シ且松前ニ渡リタルト云
俗談モアルニ依テ如是傳會セシナルベシ是童蒙ヲ欺ノ手段ト云
○國衡塚 六

柴田郡福田村ニ國衡塚アリ大高宮ノ西ノ田畔ニアリ三町余ヲ隔ツ塚ノ上
ニ杉ノ古木アリ國衡義盛ガ矢ニアリテ大串ニ討レシ処ナリ同郡平村ニ

國衡馬ヲ深田ニ翔込タル処大高宮ノ北町餘ヲヘダツ山下ノ深田是ヲ馬取
沼ト云今ニ於テ村民是ヲ耕スコトナシ刈田郡曲竹村ニ白九頭龍祠アリ
國衡カ屍ヲ此祠ノ邊ニ瘞^ツメ叢祠ヲ建テ祭之○一説ニ白山崩明神長野
ノ邊ニ小山アリ崩テ白ク見ユル也此処ニ西城戸太郎國衡カ首ヲ埋テ
明神ニ祭ルト云リ 國衡塚平村ニテ大高宮ノ南ニテチリ隔チ田ノ畔ニ松ノ古木アリ
昔ノ宮ノ迹ハ今ノ所ヨリテ程西北小高キ所ナリ 里定式

○耳輪堂 七

耳輪堂ハ始メ京都六條坊門西洞院ノ西ニアリ源頼義東征白山徒
ノ耳ヲ悉ク殺テ都ニ携上此地ニ埋堂ヲウノ上ニ建テ等身弥勒像ヲ安
置シテコレヲ薦ス今其処不詳ト雍州府志ニ云リ

○辨慶納大般若經 八

參河國御油ヨリ吉田ノ間ニ小坂井村アリ此村ニ免足八幡宮アリ社領
九十三石毎年四月十日此宮ニ於テ風ノ祭アリ昔武藏坊辨慶吾孀^ハ

下リケル時今橋断絶シテ此所ニ七日逗留シケル内大般若經六百卷ヲ頓
寫シテ此社ニ奉納シケルトテ其經今ニ相傳フ

○産湯水九

産湯水ハ洛陽紫竹村大徳寺ノ末寺大源奄方丈ノ南庭ニリ相傳
フ此地義朝ノ第宅ニシテ義朝ノ愛妾常盤此処ニテ牛弱ヲ産スソノ
時此井ヲ汲テ産湯ニ用ユ土人此地ヲ古御所ト云ト雍州府志出

○常盤之墓十

常盤ガ墓近江國關ヶ原ト今洲ノ宿ノ間ニ山中ノ里アリ義經ノ母常
盤ガ墓道ノ北森アル処ナリト云リ又播竜子ガ倍説辨ニ此墓常盤
カ墓ニアラザルコトヲ辨セリ

○漆萬盃十一

朝日夕日名ワ、漆ノ本ノと云キ漆万盃金億置

是古来倍間ニ云傳ヘタル歌ナリ一説ニ金億億ト云リ卿説ニ漆万盃
ノ内ニ黄金億ヲ交エ土中ニ埋ミ隱シ置テ末世ノ子孫ニ逃リツタユトテ
詠セシ歌ナリト云リ其処今何レノ地ナルヲ不知ソ朝日夕日ノ照ス樹
モ今枯タルルベシ里人ノ説ニ金雞山ノ土中ニ在ト云此山朝日夕日ノ
照ス処ニシテ方形ノ臺ニ築キ昔黄金ヲ以テ雞ノ雌雄ヲ造リ土中ニ
築キ籠タル故ニ金雞山ト號スルト云リ此山毛越寺鬼門ニアタルト
按スルニ沼涼ガ江戸沙予ニ是ニ似タ事アリ昔武藏國多磨郡
定野ノ中正觀寺ノ薬師堂ノ棟札ニ朝日長者日連ガ書タルニ
漆千盃朱千盃黄金千両錢十六萬貫朝日サス名カヤ
ク藤木ノ下ニ在リト云リ

○光堂三代太刀十二

光堂三代ノ太刀アリ清衡ノ太刀尺餘金具ハ鞘等今ニ残レル処アリ切先

由レトク其儘箱ニ入テ見セシムル故箱ニカクレテ短ク見ユルキ基衡ノ太刀長壹尺八寸
寸ホ柄鞘無シ朽ウセタルベシ秀乃衡ノ打刀長壹尺六寸餘幅壹寸五分植大ク
一筋細ク二筋アリ是亦柄鞘ナシ以上三柄ノ刀何レモ錆朽テ金色ニズ元禄
年中ニ棺内ヨリ出セリト云義經ノ短刀長七寸二分是高館ニ自殺シタル刀
ナリト云義經記ニ自殺ノ刀ハ三條小鍛冶ガ作テ鞍馬ニ納ル刀ノ六寸五分
アリケルヲ別當申テ口ニテ義經ノ守刀ニシタル也ト云リ何レカ實説ナ
ルコトヲ辨シ難シ

○金色堂三代棺 十三

聞老志曰後水尾朝寬永中黃門政宗君治世修補金色堂次令更
發而点檢焉清衡棺長六尺廣二尺裏之以白綾漆其體納旌劍一口並
鎮守府將軍印璽ヲ基衡裏之以白絹朱其體襯白衣表錦袍秀衡
同之藏和泉三郎忠衡首函高二尺方一尺五寸黑漆亦乃衡擊刀長一

尺六寸廣一寸二分用太刀

是乃鎮守府太刀也倍子以
聲音之同誤傳其文字

長一尺六寸出秀衡棺中

○光堂物語 十四

友直嘗得此一冊於信間而後問虛實於關山僧某某曰
此說當有取捨焉思有西京雜記酉陽雜俎輟畊錄等類之
事則奇怪亦不忍捨之故今載而以助同志之談柄矣

陸奥國岩井郡中尊寺村天台宗關山中尊寺光堂之東鑑
丹ハ金色堂と云リ内外金箔成押ク其光甚ク如ク倍丹光堂
と云リ内ハ法衡基衡秀衡三代ノ死骸棺ヲ納ク佛壇ノ下
あり板敷の上ニ立リ往河ノ日生若成應ると云々一板皮
朽損あるあり仙臺ノ於此處を造リ元禄十二年己卯の
歲仙臺より破損修復あり却作事寺以遠藤四右衛門
並市役人を以て別寺飯屋を建ク佛像並棺成移

並く里此村なる屍骸シカガミ潜ヒカカミみ見し者三人中尊
寺者主淨心院是僧ノ名ニシテ隣村の山崎村天台宗満福寺住持快
寺中尊寺流徒の中櫻下坊モトあり此人この物語或記並に
たの如し

一清衡の棺中壇の巾着あり長六尺幅三尺黒漆棺の上を物金
や少死骸常の人形しく長を並人より多を大ききあり色少
白く尺の巾着束を白綾の少袖黄色巾着束あり錦の直垂を
り一方より太刀一腰梟紙袋二ツ五内より包の書物五稜書
府將軍乃論旨あり

一基衡の棺東北の隅乃佛壇の巾着あり棺の長幅清衡の
棺より同し巾着束も同し棺ハ朱漆あり一方より太刀少尺見
々あり

一秀衡の棺西山の隅乃佛壇の巾着あり黒漆長幅前
日し一方より太刀少道具あり

一秀衡の棺の側より首桶あり高六尺四方一尺五寸黒漆
あり泉三郎忠衡の首ありと云一説より恭衡の首とも書
書付あり傍より分るあり

右三代の棺首桶とも布成りけり地少色重なり三代
何きも白ね束錦の直垂袴あり右ハ三代名別あり面鉢
何きも常代人よりとあり少梟紙むしげく巾着何も長並
人より多を大ききあり何も踏蹴坐あり清衡御死骸基
衡御死骸秀衡御死骸と唐様カラコウあり棺より書付あり
右少も虚言あり必疑あり

元禄十二年八月日

右の人々櫻子坊を翌年死に淨心院を三年了りて死に
快子ハ四十餘歳あり其翌年少里に乱あり山崎
村に去り其後方城志くは是より先き紀天正年中
の事とかや元徒の僧數人彼の死骸成りしりし其
人々或は短命或は盲目とありしと偽を事やと
云傳く甲子 光堂物語終

愚按スルニ清衡ハ大治元年丙午七月十七日卒ス元祿十二年マテ
五百七十四年基衡ハ保元二年丁丑三月十九日卒ス元祿十二
年マテ五百四十二年秀衡ハ文治三年丁未十月廿九日卒
ス元祿十二年マテ五百十四年也

○又 十五

可成談云荒木十左衛門と云人御使も奥州ありし其少

前より光堂乃佛の目を入るる金銭人の盜しりしを金議する
とて秀衡の棺をあらざりし棺五重なり外乃棺の塗
り内乃棺一重ハ桐の白木なり秀衡の死骸にける如
し等の巾と云十餘ハ長ハ中人少儀あり短髪ハ寺
むありあり形の損せざる此者の徳也や側五泉三郎
の棺先ハ志くしりしは胸頭サシカサベをとりしと云秀衡の棺の内よ
り枕一ツ太刀一振ありて玉玉の者共ハ十左衛門と見せしる也
十左衛門ハ馬城能系とれハそれ成りしとて若後重元
清門と云人奥州ありし慕ひたりと見しるると云茂卿の幼き時
詰りし枕の縁ハ枕あり房ありしも深紅の糸と云
しりし深紅の糸と云しりし三枚袴ありし拍ハ深紅の糸と云
袴と云しりし

卷之中じりあり較し綿哉と云へり柄取六引通しと云
と云積付く如けはと云へり一奇怪の物語也

愚按スルニ荒木氏ハ公義御目附役也龜子代君細村公以

幼少也寛文元年五月下旬御同役桑山伊兵衛殿當

人仙臺ハ御中ニ成候同年六月下旬少江平、水登

ニ成候可成談ふ云此人の事ハ向ふ山也

○又 十六

元文三年戊午ノ秋光堂ノ事江戸表ヨリ御尋ニ

因テ仙臺ヨリ御書上ケノ寫九ニ載ス

或覺書ヨリ之ヲ奥州光堂ノ事秀衡ノ死骸又泉三

郎ノ棺ノ事委細被成御尋候由書付之趣兼知候

光堂仙臺領内ニ由往候由云云此書付ニ向ヒ

九ノ通ヤ上候

一光堂奥州領岩井郡平泉と云所ニ秀衡舊邸ニ在リ

後法衡基衡三代ノ死骸入候棺ヲ納堂哉建物挿

金心泊り濃シ中候性古少云光堂ト云来リ右堂

之内少棺哉納堂中ノ本堂阿陀院之外諸佛共十一體

之内本堂ニ由院一軒百餘以前被盜取由由在候

处木佛木眼ニ目入之云金哉如由由是ト云候不

義傳由由在候其所寺号ハ中寺寺ト云由由中寺

ハ二山之名多光堂ト別當金色院ト云候

一秀衡ノ棺哉ある云死骸一覽ニ事出之三代ノ死骸

一山之老僧云之内見中候处摸も多由由傳ハ元禄

年中光堂修覆ニ節三人ノ棺假座ハ移云云其時云

金色院一覽はり処秀衡之棺をのり朽れぬの四方、放き
開き、その板厚は寸程ありて内外共に漆ありて海あり
上は金箔ありて濃く皮肉は骨、乾射色を帯びて髪
は白く一寸ありて生ひつねは長八中人なりとも是く
了の年齢を定まり不なり清衡甚衛棺破き不なり
右棺中見不なり右ニツの棺は木地を金箔ありて濃く
由ニ少法族

一泉三郎棺は金箔ありて秀衡棺の側より泉三郎首桶銅是
端ありとありて、その成巻包玉ありて晒頭ニありて是く是く包
之内は任傳尼ありて由ニ少法族
一石三代之棺より出た大刀之由ニ三振光堂より納ありて
枕より後より是く由ニ少法族

右之通任僧古人共の義屋自國元為ヤ登取以上

松平陸奥守内

遠藤文七郎

元文三年八月日
○三條吉次 七

金商人三條吉次カ名諸書不同義経託信高ト云熊坂ノ謡モ亦同
之大平記劔卷ニ五條吉次奉春ト云義経勳功託同之鎌倉實記ニ未
春トス平治物語ニ奥州ノ金商人吉次ト云者京上リノ次ニハ必鞍馬
ハ参リリ堀弥太郎ト云シハ此金商人ノ事ナリト云リ又鎌倉實記
ニ三條吉次後堀弥太郎景光ト改名スルト云ハ甚誤ナリト云リ
吉次屋敷址 膳沢郡衣川村ニアリ居館門ナドノ舊礎イマ残レリ
又山目南磐井川近所ニ吉次屋敷址ト云ルアリ
奥州白河ト白坂駅トノ間ニ葦籠原ト云ル所アリ海道ノ傍ニ小社

此條不係
平泉故
引墨者
歟

アリ昔三條吉次同吉内同吉六ト云元兄弟ノ者毎年都ヨリ黄金
商ノ為ニ平泉ニ下リケルカ或時此所ニテ盜賊ニ害セラル此小社其
墓祠ヲ立シナリト云葛籠ヲ捨置タル地ニハニ名ツクルトゾ又分散
橋ト云小橋アリ盜賊金ヲ分散セシ所ナリト云

○炭焼藤大ガ石碑 十六

藤大石塔偈併引

郷人傳説 近衛院御宇奥州栗原郡三迫間有藤大者賦性
朴直賣炭為業一日有異女来宿藤大家強約為婦問之自
謂京洛之人也其女知此郷山内産黄金教大堀之日多得金太
有三子曰橋次橋内吉六不幾大富起家到今其郷號曰金生
郷内山上有三子舊館地曰南館東館西館其右有金山澤
蓋藤大堀金地其丸有鶏坂大積富時作金鶏安山頂有

時鳴云山南有藤太古墳存五輪双石塔舊蹟今属郡長佐々
木龙内田莊内佐氏天姓好善施仁感其誠致富請余往看之
星霜已經五百餘年塔石傾倒文字消磨余乃述偈記為佐氏
恐其舊跡倍滅絶今特建石刊余偈引貽之後世云

偈曰

奇哉藤大至誠深 化女感来富金功
勤只餘双石塔 遺方千古令人欽

岩正徳五年乙未孟夏望後日

九二百六十九字

臨濟正宗三十五世前任大年河北開創鳳山瑞老人書

○義經古館 十九

源義經ノ宅洛陽楊梅通北油小路西ニ六條堀川御所址下リ土佐房
討手ニ上リシ時堀川夜討ト云此所ナリ今竹藪茂リテ跡ニ殘ル又

大宮四條ノ南ニ義経ノ宅ト云ルアリ庭上遊覧ノ時刀ヲ掛タルホ公ヲ掛
松ト云然ルニ此地ハ細川頼有戦死ノ場ニシテ後人ヲ松ヲ植テ徴ト為
ス者ニシテ義経ノ宅地ニ非スト云リ此古文雍州府志ニ載タリ○蹴タテ舉
水下栗田ニアリ義経關原與市カ耳鼻ヲ殺キテ並ニ從者十人ヲ斬ル
舊蹟ナリ○血洗池義経与市ガ從者等ヲ斬タル血刀ヲ洗シ
旧跡ナリ是亦雍州府志ニ出

奥州江刺郡伊手村ニ源休館ト云アリ郷説ニ義経ノ居城下
云杉ノ古木アリ此夏イブカシ

○カ士カシガ之塚 二十
佐藤忠信ガ愛妾カ士ガ塚京三條白川橋西南ノ人家ノ後園ニ
リ一説ニ須藤刑部俊通ノ塔ナリト云トニ雍州府志ニ出

○常陸坊海尊 二十一

俗説辨云倍説常陸坊海尊を園城寺の者なり後義経子
伝ハ高敏の合戦の奇山中に逃入リ仙人とあり今も至
ク富士浅間湯殿山をとり侍とあり視すと云今移居す五
雑俎子の金陵の唐詩と云者仙術哉を〜或人家
哉あり山ありんをす、む唐の曰家あり老母あり
あり事あり〜世間不孝の神仙名〜と云と証に依
之〜海尊の如きハ君哉捨〜生哉食る不忠の神仙
ありん假令仙家あり彼哉ありんとも儀を不倫理を以
〜其罪既あり刑ありあり〜又海尊今もあ
〜て居る所〜あり視する〜大あり非あり二程金書
〜仙術の事〜哉論せる如く彼の海尊も常人と云る長
命ありといふ〜たもああり〜今もあ〜ハ居る所〜

現せりと傳ふるハいも世

常陸房海尊カ事第一卷既ニ擧之又享保年中常陸
國河波大杉大明神海尊ヲ祭ルカ靈驗ノ事アリト云テ彼
所ニ飛タマフ此所ハ花タマフト云ヒ遠近ノ人信仰ヲ為シ其
神靈ヲ近國ニ擔ヒ江戶ノ方マテ擔テ老若是ヲ尊山崇也
シコトオビタシ遂ニ公ヨリコレヲ制止セラル是海尊カ靈
驗ニアラズシテ畢竟妖僧奸巫等ガ偽リ為ス事ニシテ
愚昧者ノ惑ヲトル所ナリコレヲイマシメズンバアルベカラズ

○家老館 三十二

磐井郡東山長坂村ニ家老ガ館ト云アリ里俗曰是館昔秀衡ノ家老
ノ居城ナリト云ツタフ四方離レタル山ノ頂ニシテ甚高シ上平ヲカニシテ廣
池アリテ水ヲ貯フト云今ハ畠ト為ス其人ノ名ヲツクエズ○石碑アリ近

世里人之ヲ立シト云

○花館楠城 二十三

花館城川田郡園田村ニアリ佐藤庄司ガ叔父河邊太郎高綱ガ城ナリ
又同村ニ築館城アリ里人ノ説ニ佐藤太郎ガ城ト云是亦高綱ガ城ナ
ベシト名迹志ニ云リ

按スルニ東鑑卷九ニ佐藤莊司カ叔父河邊太郎高綱經カト云リ

高綱トハ倍傳ノ謬ナルニヤ又別人ナルヤ

○神樂園 二十四

遠田郡篁嶽觀音堂北一町餘ニ願念嶽ト云所アリ是田村ノ夷賊高丸
ヲ殺セシ神樂園ナリト云按スルニ此外ニ奥州中ニ神樂園ト云ル地所々ニ
在リ

○羽黒山大堂 二十五

出羽國羽黒権現ノ堂ヲ大堂ト云秀衡ノ建立ナリ其素朴ナルコト古代ノ製ト云ヘツベシ三山雅集曰一記曰鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣秀衡大堂建立云於今秀衡妹德尼子木像在本社中又曰藤原秀衡羽黒山登山

愚按スルニ三山雅集ニ卷羽黒山東水著ス其書德尼子像坐像ニ一尺五六寸餘モアルベシ毎年襟卷ヲ製服セシムルト云リ又按スルニ鎌倉實記ニ德尼子ノ事アリ曰奥州岩城判官代府主兼帶海道小太郎成衡之後室德尼ト申ハ源頼義ノ姪ニ母ハ多氣権守宗基カ女ナリ後三年時義家養女トシテ直理権守清衡ニアツケテ常陸大掾清行嫡子小太郎成衡ニ嫁ス其基衡カ媒ナリト云云○以上ノ兩説不同疑ラクハ是同人ニシテ異説ナルベシ系圖ヲ考ルニ秀衡ニ妹無シ識者ニ問テ之ヲ決スベシ

○長命山城 二十六

長命山城宮城郡上谷刈村ニテリ山領他ノ木アルコト無シ青椽藪葺枝ヲ交テ並立セリ郷人長命山上云東鑑ニ泰衡カ軍兵コモリタル國府中山物見罔ト云ルハ此所ナリ館北ヲ伊谷沢原ト云頼朝ノ陣所ナリト云ツタマフ

東鑑ヲ考ルニ頼朝ハ此所ニ陣セズ小山下河邊寺ヲ差向ケテ其身ハ玉造郡ニ趣キタマフトアリ後世誤ツタエタルニヤ

○北條九代記頼朝奥入 二十七

北條九代記ノ中頼朝奥入事全ク東鑑ヲ以書タリト雖トモ東鑑ニ異ナル事多シ是世人ニ傳フコトヲ求ルガ為ニ造言ヲ以テ原文ヲ偽リ飾レリ又原文ニ傳写ノ誤アルヲ考ヘズシテ其説ニ從テ之ヲ改メザルモ亦多シ讀之者本書ヲ參看シテ謬誤ヲ正スベシ

助公法師が歌モ本書ニ異ナリ別ニ考ルル処有テ然ルカ予畜書コト不
廣シテ多ク事ヲ漏シヌル遺憾ナキコトアタハズ

○田村將軍建立堂社 二十八

或^時人友人ト夜話ノ次テ仙臺領内ノ田村建立ノ堂社ノ事及テ其
需^{モトメ}ニ應ジテ弟子ヲシテコレヲ封内名迹志ニ考ヘシメ間コレニ増添シ
テコレニ載ス此外モ亦多クイハレ悉ク尋子求ルニ便無シ餘ハ他日考ヲ
俟ト云

- 一鎮守府八幡宮 騰沢郡八幡村ニアリ 東鑑ニ詳ナリ
- 一達谷屈毘沙門堂 岩井郡達谷村ニアリ 東鑑ニ詳ナリ
- 一斗藏觀音 伊具郡小田村ニアリ 大同年中建立
- 一白山社 江刺郡角掛村ニアリ 田村東征ノ時祈ル所ナリ
- 一聖王觀音 仙臺城東石那坂ニ在リ 田村東征ノ間宮城ノ産ナリ 聖

王子ト云ル側室アリ其人護持ノ觀音ナリ寺アリ満金山圓福寺

ト号ス寺ニ池アリ此池中ニ塩釜社ノセツノ釜ノ内一ツ有ト云ニ三十年
前池中ヨリ其釜ヲトリアゲシニ俄ニ大雨降テ池ニ流レ入リト云今池邊

ニ注連ヲ、王オケリ釜ノ形今塩釜ニアル釜ニ同シト云リ

- 一松島五大堂 松島ノ島ノ上ニアリ 大同二年田村ノ創立五大尊ヲ
安置ス又一説ニ慈覺ノ建立ト云

- 一富山觀音 宮城郡手摺村ニアリ 大同年中建立別當富山大
仰寺此山ヨリ松島ヲ眺望スル絶景筆舌ノ及フ処ニ非ズ

- 一塩釜^鹽社 加美郡四竈村ニアリ 田村勸請ト云
- 一篁嶽觀音 遠田郡無夷山篁峯寺ト号ス此山田村ノ舊
跡多シ

- 一和淵神社 同郡和淵村ニアリ 貴船明神

善

一牧山觀音 壯麻郡湊村鷲峯山長祥寺ト号ス本尊秘佛海

一底界網入テ得タリ田村造立又慈鎮ノ開基ト云

一大武觀音 栗原郡依沼庄南方村夷賊大武丸首ヲ瘞テ大同

一八幡宮 栗原郡二迫庄八幡村ニリ延曆年中建立昔寺アリ

一清源東寺ト号ス義家奉納ノ劔甲曹鎬矢等有

一清水觀音 同郡三迫莊岩崎村音羽山清水寺ト号ス

一小迫觀音 同郡小迫村寺アリ昔ハ小迫山正大寺ト号ス今改

テ樂峯山勝正寺ト云坂上將軍俊宗創立ス

按スルニ坂上田村尨ト藤原利仁トヲ俗悞テ一人ト為シテ田村將

軍利仁ト云フ故ニ田村ノ子ニ利宗ト云者アリト云説アリテ

筆ヲ操テ事ヲ託スル者モ間コレヲ悞レリ爰ニ坂上將軍俊

宗トイハルモ後世縁起ヲ作レル者ノ妄説ナリ○倍説辨云田村

九ノ子ニ伊奈瀬五郎利宗ト云者アリト據ヨリ日本後記續日本紀

大系圖ヲ考ルニ田村ノ子ヲ廣野麻呂ト云伊奈瀬五郎ト云者

俗間云

一長谷觀音 登米郡水越村ニリ寺ヲ遮那山長谷寺ト号ス

一鱒淵觀音 同郡鱒淵村寺ヲ竹峯山華足寺ト云大同年間

田村ノ乘馬此処ニテ死シタルヲ埋テ觀音ヲ建ルト云

一矢作觀音 氣仙郡矢作村長谷山觀音寺ト号ス

一小友觀音 同郡小友村溪頭山常膳寺ト号ス

一猪川觀音 同郡猪川村龍福山長谷寺蜜永年中堂下

ヨリ掘出セシ鬼ノ齒ト小刀トアリ○右ニ所何レモ一文ニ近キ大佛ナリ

一五葉山神社 同郡カニアル上有住村ニアリ

以上二十一ヶ所ノ堂社各縁起アリ今略之是仙臺領内而已ニシテ

不涉他領矣田村之所創立觀音多々謂長谷謂大同謂飛彈
内匠一夜造立三所之堂ノ類悉ク信スルニ不足○名迹志云田村之
於觀音到處必立烏号之多以長谷為田村所信者蓋雍
州清水寺之佛也胡為然皆是後人擬田村且不辨所信
之事實妄呼之者亦可疑

○大將軍 二十五九

北上川ノ東長部村ニ大將軍里俗ニ此神ヲ大上宮ト云者有誤ナルベシ神有山中也
是何神名莫ヲ知ル者ナシ昔ハ里人祭日ニ齋シテ參詣セシト云リ
愚按スルニ京東山ニ將軍塚有リ桓武帝平安城ヲ築タスル
時此塚ヲ建立シタス乎リト云詳ニ雍州府志等ニ見エリ清衡
平泉ヲ築ケル時平安城ノ將軍塚ヲウツシ勸請シケルナルベシ

○辨慶石 三十一

後花園院享德三年奥州辨慶石入洛スト和漢年
表祿ニ出タリ

平泉雜記卷之四

相原友直著

○藤原清衡生卒考一

鎮守府將軍陸奥出羽押領使藤原清衡父公直理權
 大夫經清母安倍賴時カ女ナリ七十代ノ帝後冷泉院康
 平四年辛丑ノ歲ニ生ル同五年壬寅九月父經清ニカクレテ後清
 原武則ニ養育セラレテ子トナル又一說ニ武則カ嫡子荒川太郎武貞
 カ子トナルト云リ七十三代堀河院寛治三年己巳廿九歲時源義家
 朝臣ニ加勢シテ武衡家衡ヲ征 奥州平均ノ後同六年壬寅三十三
 歲ノ時陸奥出羽ノ自代ト為リ其後奥六郡ヲ領シ陸奥出羽押領
 使トシテ鎮守府將軍ヲ兼又同御宇嘉保元年甲戌三十四歲ノ頃
 江刺郡豊田館ヨリ磐井郡平泉ニ移シテ居館ヲ構テ平泉館ト
 号シ奥御館ト稱ス同御宇長治二年乙酉四十五歲ノ時中尊

寺ヲ建立ス七十四代鳥羽院天仁元年戊子四十八歳ノ時紺紙金泥行交一切經ヲ書寫セシメ經堂ヲ建立ス鳥羽院ノ勅願ナリ即今ニ相傳ル所ノ經並ニ堂是ナリ同二年己丑金色堂ヲ造立ス是今アル所ノ堂佛像是ナリ七十五代崇徳院天治三年丙午三月廿五日經堂ヲ領骨寺ヲ寄附ス此歳改元アリテ大治元年ナリ此歳七月十七日行年六十六歳ニシテ卒ス即屍ヲ金色堂中央ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍今ニ在リ

○基衡卒去ニ

鎮守府將軍陸奥守從五位上藤原秀衡八十二代後鳥羽院文院ノ保元二年丁丑ノ歳三月十九日卒ス屍ヲ金色堂東北隅ノ佛壇ノ内ニ納ム其屍今ニアリト云

○秀衡卒去三

鎮守府將軍陸奥守從五位上藤原秀衡八十二代後鳥羽院文治三年丁未十月二十九日卒スルト東鑑卷之七ニ出タリ義經記ニ文治四年十月廿日卒スルト云ハ誤ナルベシ大系圖ニ死スル歳九十二ト云リ依之考セシ二代堀河院ノ永長元年丙子ノ歳ニ生レタルニヤ文治三年マテ九十二年ナレバナリ是亦屍ヲ金色堂西北ノ隅ノ佛壇ノ内ニ納テ今ニ在ト云リ

○頼朝卿送秀衡入道書 四

東鑑云文治二年四月廿四日陸奥守秀衡入道請文參著貢金等先可沙汰進鎌倉可令傳進京都由載之云云是去比被下御書御留者奥六郡主予者東海道惣官也尤可成魚水思也但隔行程無所于欲通信又如貢馬貢金者為國土貢印爭二不管領哉自當年早予可傳進且所守勅定之趣也者上所與

御館御館云云

○清衡經藏寄文 五

以下ノ文書古來中尊寺ニ相傳フル所ナリ今傳写ノ本ヲ以写ガ故ニ亥系ノ誤アルコトコレヲ計リ難シ

鳥羽院御願

關山中尊寺金銀泥行交一切經藏別當職事

僧蓮光所

所領骨寺

磐井郡有之

御堂出入料田淡田取屋取寺所

滋原

有是燈明料所

北谷赤岩兩所禁多ク

滋原村ナリ

每日御佛供料白米二斗可入銅鉢試之自高御倉可被取信之

每月箱拭料上糸絹是白布是取自御改所可取請之

每日每御佛事請僧老白可取請定

毎年正月修正二季彼岸懺法毎月文殊講彼以骨寺田畑一向可募之故也 是備聖朝安穩御祈禱無懈怠可令勤仕右件於自在房蓮光者為金銀泥行交一切經奉行自八ヶ年内書寫畢依之且為奉公且為器量在御經藏別當職所定也就中令寄進蓮光往古私領骨寺然其限永代任蓮光相傳致御經藏別當並骨寺者不可在他人妨仍之令寺家宜兼知之狀如件

俊 慶判

天治三年 丙午三月廿五日

金清兼判

坂上季隆判

藤原清衡朝臣判

愚按スルニ天治八十五代ノ帝 崇徳院ノ年号三年ハ大治
ト改元スト云リ前太平記ニ直理経清ハ康平五年ニ誅セラ
ル此時清衡ニ歳ト云リ然レバ康平四年ニ生ル此歳ヨリ大治
元年マテ六十六年ナリ

○頼朝卿御下文 六
鳥羽院御願

關山中寺寺河經氣所領骨与内籠居人等事
早於彼雜人等者還本住所ニ成安堵思也但限骨寺
内境東者鎰忽南者岩井川西者山王岩屋小者山峯山
堂之末限馬坂惣於境者之限水境也仍所被依下執
連如件

愚按スルニ東鑑被下御奉免狀ト云即此書ナリ親義ハ齋院次官

親能ナルベシ

○北條相模守貞時同陸奥守宣時文書七

陸奥守國平泉中寺衆徒中寺領山野事重訴狀
之肯下知狀被違乱候間着差使者之處代官明資尚以
不承引云招其答欵早任先少知可令停止濫妨也者
依仰執達如件

陸奥守判

永仁二年十二月廿五日

相模守判

壹岐守後

愚按スルニ永仁九十一代伏見院ノ年号二年ハ甲午ノ歳也鎌
倉將軍第八久明親王ノ時ニテ北條八七代目ナリ壹岐守

八葛西家十九

○學頭職補任狀八
補任

中寺寺學頭職曰免田寺所

免田寺所 宇津木根 村有之 並佛性院

曰小坊地寺所事

檢律師公圓

右職任以盛律師今月五日返狀云令領掌之次坊地之事
任新順應長元年十月廿五日讓狀云不相違仍補任狀如
件

正和二年三月七日

別當法平權大僧都判

愚按久三慶應長八九十四代花園院元年号元年辛亥十リ

正和七同御宇二年八癸丑十リ應長元年ヨリ三年後十リ

○從本寺之下知狀九

可被尋注進條

一金色院堂密供僧同經衆等長日供養法印讀經等退
轉之由有其聞早之所職相傳以才云悉量勤否可
以注進之矣

一同堂經由二口所持族在之云云所給云云相傳所持法否
之尋注進之焉

一白山宮長日大般若並講讀等再以退轉云云守舊規之
令勤切之間相觸之不叙用注進之矣

一引募免田之族令懈怠寺役送年序云云以注進申名字

之子細同前焉

一依帖元徒等寺中制法雜居里中亦祈禱以下寺役
 等一向不法云云不備一人注進同前矣
 一闕往古場安令居住里中或寺元徒一同悵文以坊諸
 並諸堂古以被種之耕化之由有其中委卯云注申也矣
 一稱自今以寺內用木等任雅意伐取云云於向後者固
 可令停止之若有不拘制法寺者可云注進云父名也
 一二十竊以寺落染事聊云其少欵云注進名字焉
 一於寺中放飼牛馬之間併堂社損亡云云於至自今以後者
 不可云此義若令遠犯者不謂親疎捕牛馬云云注申由
 且可云寺社修理宜修注進左右也矣
 一背先規令狹少寺中小路云云早紀舊引引繩云云廣之

於及吳氏寺者云注申云父名焉

一未安堵等者有之云云不殘一人云云尋注進也
 右條之為沙代官云云在國不知催促不及注進云云在沙
 汰之系併當寺荒廢之甚欵所難且究淵底且存知之
 分各備頗矯飭之者載起請之詞急速云云注進之狀如件

沙汰判

正慶元年十月三日

控少僧教判

中寺寺控別苗沙坊

愚按元正慶九十六代光嚴院曆号元年八壬申十リ

○北畠中納言顯家卿國宣十

平泉中寺寺者陸奥出羽兩國之甲區堀河鳥羽二代之

勅願也因茲代之宰吏歸依等久諸方之道倍渴俾日新
交比年武士及甲乙人等寄縲於蝦夷島賊追伐或闖入郡
門致狼藉或ハ押妨寺領及馳使云云太以監吹也慥可
洗停止若有違犯之者就注進交名可被決出嚴科
由國宣所候也執達如件

大藏控少輔清高奉

建武元年九月六日

衆徒等中

愚按スルニ建武ハ光嚴院年号也後醍醐帝此年重祚
シタマフト雖トモ不及其礼元年ハ甲戌ノ歲ナリ清高ハ結城
上野入道道忠ガ子息ナルベシ太平記ニ道忠ガ子大藏少輔
ガ事アリ又伊達靈山館ハ頭家卿ノ居城ナル事ヲ載ス里

人今ニ於テ國司館ト云今清高ガ此文ヲ讀テ頭家ノ家學ヲ
紹キ其餘風ノ家臣ニ及ブ夏ヲ知ル月卿ノ家ニ生ルト
雖トモ其武勇モ亦國司ノ任ニ耻ル事無シ

○若狹守行重文書 十一

平泉中ノ寺一切經藏領骨寺村之事

右之所去依近年勳乱雖令知以世々為名異ノ別
當遠卿律師行榮方彼所者如元相濟中疾也仍如件

延元三年二月廿八日 若狹守行重判

愚按スルニ延元ハ前同ノ光嚴院ノ年号三年ハ戊寅ナリ此
歲曆應ト改元ナリ

○平泰忠文書 十二

平泉中尊寺別當領事

任被_レ作_レ之旨。伊澤郡内黑沃村同郡宇津布村同郡
小保村江刺郡内过服村日郡倉沃村斯波郡乙部村於彼
所_レ相渡_レ別當代頼禪所仍_レ渡_レ状_レ件

康永三年六月廿日

平泰忠判

愚按_二康永八十七代光明院年号三年八甲申十リ

○仁木義長文書_{十三}

仁木九京大夫義長書判

禁制

陸奥國平泉中_レ寺所領同國岩井郡骨寺村事

右於當所_レ軍勢_並甲乙人等_並多_レ致_レ乱入_レ狼藉_若五_レ違
乱之_レ族_去可_レ処_二重科_レ之_レ状_レ如_レ件

觀應二年正月廿八日

愚按_二觀應八九十八代崇光院_一年号二年八辛卯十リ

足利尊氏_一時十リ

○越前守親重文書_{十四}

平泉中_レ寺所領骨寺村事

右件於所領者且_レ大伽藍_由事_と中_レ以_レ身_之為_レ祈禱_と如
元相渡_レ之_レ状_レ件

至德二年八月八日

前越前守親重判

經藏別當

愚按_二至德八百一代後松院_一年号十リ二之字於_レ字書_未考_レ得_レ之_レ康熙字典_云三說_レ文_籀文_四字_集韻_關東_謂四
數_レ為_二三_一是_レ以_レ見_レ時_八二_七示_四ノ_字十_レル_ベシ_又牡_廉郡_漆
東南_二日_輪山_多福_院アリ_古石_墳アリ_其石_面奉_為

吉野先帝御菩提也延元二年霜月廿四日敬白^勅
セリ名迹志ニ載之註云二字恐分畫四字也ト後醍醐
帝ノ崩御諸説アリト雖トモ延元四年^{北朝曆}八月十六日ヲ以
テ正トス然レバ四字ナルコト無疑霜月廿四日ト勅セシハ崩御白
ヨリ至此日九十九日ナリ是百箇日ノ御追福ノ為ニ其臣タレ者
碑ヲ立タルナルベシ又中古ニノ字ヲ用タルモノ間アリ我卿ニ
鼓ノ許可ノ卷ヲ持傳ヘタル者アリ看之永祿二年正月吉
日ト記セリ本邦古來文字ノ音訓忌諱多ク疑ラクハ四音
死ノ音通スルヲ忌テ斯ク書ルニヤ又古境部連石積
新字ヲ造シト云ル事アレハ其字ノ殘レルニヤ又易卦爻ニ
倣テ造レルニヤ又釋氏以ノ字ヲ以ト書テ佛經ノ外題ニ
蒙ラシムル事アリ畫ノ相似タルカ故ニニヲ以四ニ換タルモカ

リ知ルベカラズ暫書之以待識者耳

○古文書二通 十五

可被停止別當任符事

右訴陳之趣予細能多所詮允徒一与寺帶文治建久
ト知狀寺僧者行領者勅代トテ不取別當任符ト申允
徒能了之如文永元年ト知狀者寺僧相傳師跡ト時
為寺務之仁爭不成任符哉 徒則寺僧則不相從別
當成敗別當又守先例不致新儀之沙汰云云者不
及矣儀焉

愚按文治建久共八十二代後鳥羽院ノ年号文永八十
九代龜山院年号

院主職事

右如文永元年不知者任先例寺僧之中撰置量之仁
可補之云而補監僧公禪之由元德令中之地公禪為
淨山蓋量之仁雜掌中之者公禪為監僧否尋元
之後可五元右次曰院主領分滋原村河原宿事為
胸臆論之右為院主分否曰尋究元右次別尚刻
取曰院主分田畑之由元德令中之右施行付之在
尋問之處雜掌不論中領德元元可返自干院
主焉

○關白秀次公御朱印 十六

札朱印

一此所土民百姓等如家之可去付以九年責備設如等
一其相御也何機至仕万為以從亂後之旨

本年之責負少可免許事

一百姓橫合非分之儀何方分中知以之可為事
一市中上之速可相從事

一百姓作子當他毛身以事定與若百姓迹先
一何者之也百姓之身事四所定也件

天正十九年七月五日

○秀次公御書 十七

定

一軍勢於時方地乱妨狼藉之等云為謀伐事
一對地中人百姓非分之儀不云也事
一旅陣取火以陽可之生者或搦捕之出之自他可逐
電去其主人曲事云之為事

一 若新ゆゑの事ト以下多々相理云々之事
一路次第少知れぬ事借事人足等々毎座の曲
事ト云々云々云々

右條にお違犯云々事云々忽云々處爲科者也

天正十九年七月七日 秀次書判

愚按スルニ奥州九戸近將監政實ト云者逆意ニ依テ夫
正十九年六月秀吉公ノ下知トシテ九戸征伐大將蒲生氏
郷惣大将三好中納言秀次公其外諸軍勢ト向アリ曰
九月政實誅戮セラル諸軍凱陣ナリ秀次公八奥勤ノ
御は云々残無ク仰付ラレ平泉一覽有テ後出羽最上ニ
出テ上京シタマフ右ノ定ハ此時ノ掟ヲ中々寺ニ納置
ルルベシ

○淺野彈正少弼長政之文書 十八

中々寺門前百姓等悉令還任耕作之任聊不苛
責非分之成化自他借事人足等々事ト云々
之一切石云々云々引者也

八月十七日

淺野彈正少弼

按スルニ此書年号ヲ不記察スルニ天正十九年ノ秋九戸陣ノ
時ノ事ナルニシテ爾書云秀吉一統初淺野長政居京職後
爲執事之一員專掌政務矣又檢知關東及奥州之
郡縣于今依其法矣

○朝鮮陣御掟 十九

一 唐入子月戸御在陣中侍中百少者あり一子人交以事
ありさるる事云々云々

中一類并執絶在祈禱被加成就但能^為身苦志
一其^も其^も其人^も一人^も一^も歳^も赦免^もを^も以^も使^もと^もて^も海
一^も其^も主人^も慍^もの^も事^も月^もお^もる^も者^も為^も罪^も科^も事^も
一人^も足^も飯^も者^も之^も事^も惣^も別^も給^も為^も給^も人^も之^も念^もを^も入^も可^も事^も
一遠^も玉^もより^も以^も德^も信^もの^も事^もを^も軍^も彼^もを^も送^もく^も事^も也^も事^も也^も
一^も其^も月^もハ^も移^もり^もの^も代^もに^も仰^も付^もの^も事^も也^も事^も也^も
一御^も陣^もハ^もの^も其^も百姓^も之^も田^も畑^も之^も事^も其^も郷^も中^もに^もて^も作^も仕^も
一^も其^も之^もも^も一^も荒^も玉^も者^も之^も郷^も中^もに^も歳^も以^も成^も敗^も言^も之^も事^も
附^も為^も郷^も中^もに^も他^も毛^も成^も仕^も右^もお^もる^も事^も也^も事^も也^も
一^も御^も陣^もハ^もの^も法^も也^もハ^も若^も黨^も少^も者^も事^も久^もノ^も事^も去^も年^もの^も紀^も南
一^も守^も分^も之^も角^も一^も之^も也^もハ^も以^も旨^も於^も其^も旨^も事^も也^も事^も也^も
一^も其^も可^も有^も曲^も言^も事^も

右之條ハお違北背ノ事去々ハ處處科者也

天正廿九年四月日 御朱印

愚按ニ秀吉公朝鮮陣御從中尊寺ニ納置タル事

○中尊寺神事制札 二十

札

一每年中尊寺神事相違之旨御事

一寸里仕者お多々ハ上程ハ仙臺、之ハ相違ハ

右條之法旨堅可抄者也

寛永四年卯月十日 茂庭周防守書判

按ニ茂庭周防守延元ハ黃門政宗卿ノ家臣也

○御墨印寫 二十一

平泉領之事

一貳費四百三拾九文

院主坊

一叁費六百九拾五文

西公坊

一肆費九百六拾八文

竹市坊

右於莊莊并那中尊寺村都合之費九拾八文之所寄附
之託別幣 讀經掃地勤行等事有王怠慢者也仍狀
少件

寬永廿一甲申年八月十日 御墨印

平泉坊中

○從東叡山之文書 二十二

陸奧國平泉關山中尊寺古德往古佛法紹隆之傍
地台宗弘通之淨刹也能就布寺未相定之旨請屬于
東叡山由來因茲今般被官加御門下院者自今以後不

北背布寺之知佛事勤行等不可有怠慢之依輪
玉寺宮之系法親王之御執達少件

寬文五年十二月五日

任心院判
無覺院判

中尊寺

○從東叡山法度條々 二十三

奧州平泉關山法度條々

- 一可抽天下養平國寺清寧之丹祈事
- 一三季講演并且夕之勤以不忘教悔忌事
- 一講演神事者於山白山神家可相勤之祈禱若經花
佛事者於光堂可執行事
- 一寺之自佛家至及迄各油引之被掃臨事

一諸徒黨^ヲ繼連^キ署^ラ公事沙法仕官^ノ爲^ル事
右條之^レ望^ニ采^テ寫^シ之^ル旨^ハ依^テ輪^テ寫^シテ^モ亦^モ法親^王之^レ仰^ニ執^テ連^テ
仍^レ少^ク辨^ス

延寶四年九月廿四日

見明院判

親理院判

中書寺

元信中

○同書狀 二十四

一筆中入作^レ金山^ノ及^テ寺院^ノ一宗^ノ法^式善^繼之^レ事
在^レ至^レ之^レ旨^ハ漸^ニ進^ス示^シ之^ル旨^ハ宗^ノ被^テ執^テ古^ノ旨^ハ相^ノ
知^ル旨^ハ將^テ又^レ此^ノ後^ニ全^ク色^ノ院^ノ法^式僧^ノ之^レ旨^ハ由^テ孫^ノ旨^ハ若^シ我^ノ末^ノ

八法僧^ノ年^ノ被^テ中^ノ旨^ハ可^ク爲^ル宗^ノ旨^ハ中^ノ意^ハ旨^ハ旨^ハ旨^ハ

九月廿四日

見明院判

親理院判

中書寺

元信中

人王色院

徑飛到

大長秀院

惣色院中

愚按^ル上^ノ右書不^レ記^ス年号^ハ日^ノ月前^ノ書^ニ同^ク以^テ示^ス者^ハ時^ハ延^寶四
年^ノ十^月十^日無^レ疑

○毛越寺領之事 二十五

一當州之刺史大膳大^ノ時^ノ行^テ兩^ノ寺^ノ巡^テ禮^ス之^レ時^ハ爲^ル佛^ノ餉^ノ燈^ノ油^ノ之^レ
料^ノ取^テ下^ル毛^越寺^ノ古^ノ柏^崎七^ノ村^ノ中^ノ尊^ノ寺^ノ古^ノ滋^原馬^ノ沃^ノ白^濱三^ノ

村被為寄附云

一鳥羽院御願所平泉毛越寺知隆寺六口供僧三拾六所
口別之町六口柏崎之内右之地頭四方田右湯門耐景綱
父子四十餘年之押領彼六供近年新申之刻被改押
領之附供僧年

奉引 雜賀弥次郎

一毛越寺往古之寺願三迫三拾三口之内大荒市村神社寄
進状寫

敬寄進

八幡宮御神田御之田

五願天王御神田御之田

右神之人の敬よりしる位或まし人ハ神のめくしる

少川て種花山院内大臣大信於此坊代とて成清寄
進しるましまるありと強ましまるましまるましまる
成まよりしる知りある屋敷状の件

建武二年十二月二日

平泉毛越寺権別當 若狭中務左近藤原成清

○中尊寺寺院 二十六

別當 一山之長

西谷坊 大長壽院

別所坊 大徳院

永根坊 瑠璃光院

中野坊 願成就院

大林坊 眞珠院

金色院 本號竹下坊

小前沢坊 法泉院

東谷坊 地藏院

觀泉坊 積善院

北本坊 藥樹王院

池邊坊 金剛院

觀智坊 觀音院
櫻木坊 圓乘院
歡喜坊 利生院
兼仕法師行善

吉祥坊 圓教院
南谷坊 常任院
上西谷坊 釋尊院

○毛越寺寺院 二十七

隆藏寺
常本坊 千手院
池上坊 明禪院
鳥谷崎坊 金剛院
千饒坊 壽命院
圓藏坊 壽德院
千光坊 藥王院

柳下坊 大乘院
寂淨坊 感神院
覺上坊 白玉院
連饒坊 慈光院
山饒坊 普賢院
善正坊 正善院
櫻岡坊 寶積院

梅下坊 覺性院
寶全坊 福唱院
兼仕法師鏡全

圓光坊 光圓院
蓮乘坊 蓮乘院
同圓明

右中尊寺十八區兼仕一人毛越十八區兼仕二人今於下殘
ル処ナリ

○秀衡古城 二十八

秀衡城跡名取郡吉田村在リ高楯城ト云東南ニ秀衡任下齋アリ
上ニ高館熊野権現アリ又一説ニ頼朝東征時次軍ノ地ナリト云
伊達植宗君往年伊達ニ往多ク時葛西大崎ト屢合戦シタマヒテ
刈田柴田伊具巨理宮城黒川深谷松山等幕下ニ属ス其頃
家臣福田駿河ヲシテ此城ヲ守ラシム

○泰衡城址 二十九

泰衡が假館川田郡中ノ目村アリ古池アリ今ニ於テ泰衡池ト云後ニ
結城七郎朝光コニ居レリ

○黒岩口三十一

黒岩口ハ栗原郡三迫庄岩ヶ崎村ニアリ東鑑ニ泰衡軍勢ヲ一野邊ニ
置テ鎌倉勢ヲ防ガシル処ナリ郷人ニテ黒岩館ト云中古富澤日向ト
云ル者居之

○一ノ野 三十一

膽澤郡二ノ野ト云所アリ出羽仙北ノ海道ナリ東鑑ニ泰衡軍勢
ヲ一ノ野邊ニ置テ鎌倉勢ヲ防ガシムルト云ハ此所ナルヘシ又西岩
井ニモ一ノ野ト云所アリ栗原迫ニ近シ

○津久毛橋 三十二 ツ久毛橋五造郡上ノ目村ニ有リニツノモノ
追テ考合スヘシ

津久毛橋ハ栗原郡三迫庄平形村ニアリ橋ノ西ハ平形東ハ岩ヶ崎ナリ

今ハ紅蒲藻橋ト書ス文治ノ後梶原平次景高此橋ニ歌ヲ詠シ事東
鑑卷九ニ出ツ

陸奥乃勢ハ河方ニ津久毛橋渡志々懸ニ泰衡力顕

郷俗ノ説ニ頼朝奥入ノ時江蒲藻ヲ集メテ此川ヲ埋テ諸軍勢ヲ渡セ
シ故ニカク名ツケシト云ハ儼コトナルヘシ東鑑云ニ品經松山道到津久毛橋給云
是ヲ以頼朝此地ニ來ラザル前ヨリノ名ナル事ヲ知ルベシ此邊舊跡多シ橋
ノ北ニ江蒲藻山信樂寺ノ古址アリ此地ヲ泰衡ガ戰場ト云ヘト東鑑
ヲ以テ考ルニ泰衡ガ家臣等ガ戦シ地ナルヘシ○十三壇連架橋北廿五
間ヲ隔ツ所ニ古館跡アリ上ニ壇十三アリ北ヨリ南ニ連リ並ブ其故ハ詳ナ
ラズ或人曰此地ハ昔ノ戰場ニシテ戦死ノ者ヲ瘞シ墓ナリ
不寐壇岩ヶ崎ニアリ信樂寺跡北ニ古壇アリ泰衡營陣時士卒守
夜ノ所ナリ里人鼠壇ト云ハ謬ナリ

○秀衡矢立杉 三十三

秀衡箭立杉ハ名取郡望島村道祖神社ノ西ノ内澤ニアリ昔秀
衡上京ノ時此所ヲ過ケルガ路ノ傍ノ松ニ矢ヲ射テ首途ヲ賀ス從者モ亦
各是ヲ射タリ明曆中マテ其杉猶存セリ圍一丈許アリ其頃郷人高船
ヲ造ラントコレヲ伐ケルニ杉鳴動シテ板トスニ鏃多クアリ船造テ海上ニ
浮ブルニ忽破レタリ

愚按スルニ義經記ニ秀衡一生上京セザリシト云リイブカシ樹ニ矢ヲ射タ
ツルコトハ昔ノ風俗ナリ神社ノ古キ樹木ニ今ニ鏃残りタル者所々アリ賴
朝東征ノ時高水寺ノ鎮守走湯權現ニ奉ルトテ社邊ノ樹木ニ矢ヲ射
立シトナリ是ヲ郷人賴朝矢立槻ト云其樹今ハ枯テ根ノニ殘リ別ニ
繼ノ木アリ此事東鑑ニ見ヘタリ又曾我物語ニ矢立杉ノコトアリ又足柄矢立
杉アリ武道ヲ祈ル者此杉ニ矢ヲ射立テ手向テ祈書ニ出タリ

○千塚 三十四

柴田郡沼邊村並神山西南三十餘町ニ千塚アリ古墳累累多ク是賴
朝東征ノ時戦死ノ士卒ヲ瘞シ所ナリ其數多ク以千塚ト云リ今ハ千
田ト為ル

○鬼切部 三十五

鬼切部ハ昔賴時貞任等上藤原登任平繁成合戦セシ地ナルト前
太平記ニ看ヘタリ愚按スルニ鬼切部ハ今ノ栗原郡首ノ事ナラニカ切
ノ字ヲ誤リ写シ切ノ字ト為タルニヤイブカシ同書ニ和賀郡ヲ知賀
トシ本拾芥抄ニ誤レリ東鑑ニ加賀ト為シ武家評林ニ贄柵ヲ熱柵トシ
舟迫ヲ舟泊トスル類擧テ計フヘカラス鬼首ハ往昔鬼ノ首ヲ瘞タル
故ニ村名トスルト云ル郷説ナリ此岩井郡ニ鬼首骸村アリ氣仙郡ニ越鬼
來村アリ今越喜來ト書此所ハ海濱鬼ノ舊跡多クニ奥州觀音ノアル所多クハ田村ノ

ノ舊跡ニシテ鬼ノ事實アリ實ハ蝦夷ニシテ其容貌人ト異ニ暴虐
ニシテ世人ヲ惱スニ依テ鬼ト呼ヒ來ルルニヤ日本武尊田道十七代仁
來鎮狄按察使歷代鎮東補任考等ノ舊跡モ多カルベシ今其傳ヘラ
失ス誰カ是ヲ不惜ヤ見親迹聞老志

○佐藤忠信之鎧三十一 三十六

秀吉公天正十八年七月十四日小田原御進發アリ先陣松坂少將氏卿
蒲生飛澤守ナリ同十九日野州宇都宮ニ着セタマフ此時徳川家臣本多
中務太輔忠勝ヲ召ル鎧一領ヲ忠勝ノ前ニ置ク秀吉公タマフ是則
古ノ佐藤忠信ガ曾也トテ奥州ヨリ献ル所ナリ然レトモ當時コレヲ着
スベキ者ヲ撰ムニ忠勝ヨリ外アルベラズト其勇敢ヲ大ニ稱美ナサレ彼
曾ヲ恩賜アリケレバ忠勝面目ヲ施シ拜戴シテ退キ永ク子孫傳ヘテ
家ノ寶トゾセラレケルト本朝三國志卷三十五ニ出

○義經首 三十七

鎌倉實記云義經ノ首東鑑ニ文治五年六月十三日腰越ニ至ル上書ルハ
傳写ノ誤ナルベシ四月晦日ニ討タレ者六月ニテ延引スベキニテ友直按スルニ
是實記ノ作者東鑑ノ全編ヲ不讀ノ誤ナリ東鑑ニ奥州泰衡カ飛脚
五月二十二日申刻ニ鎌倉ニ參着シテ去月晦日豫州ヲ誅ス其頸ハ追テ進
スベシト言上ス鎌倉ニ其項鶴岡ノ塔建立有テ六月九日ハ其供養ナ
リケレバ義經ノ首無左右鎌倉ニ持參スベカラズ途中ニ逗留スベシトテ六
月七日ニ飛脚ヲ奥州ニ下サル依之口サト延引シテ六月十三日腰越浦ニ至テ
此旨ヲ鎌倉ニ言上スト云リ又鎌倉實記ニ云ルハ義經ノ首ト名付テ鎌倉
ニ實檢ニイレシハ義經ノ身替リニ立ル杉月行信ガ首ナリト云リ愚按スル首
實檢ニ頼朝ヨリ腰越一ツカハサレシハ和田義盛ト梶原景時ナリ若其首ニ
疑アラバ景時豈其供ニテウキ過シヤ景時性質好佞ニシテ讒言ヲ以

恒上況や義経ハ遺恨アル人ナリヲや實記ノ説信ズル不足故ニ野史ノ妄説ヲ不采シテ正史ニ從フ

鎌倉志ニ云鶴岡ハ幡宮ノ護摩堂ノ五大尊ハ運慶力作ナリ大威徳ノ乘タル牛ノ足膝ヲカクメタリ相傳フ義経ヲ調伏ノ時折テ也

○南部戸頭武國三十八

鎌倉實記ニ南部戸頭武國ト云者アリ是建久以前事ナリ然レ建久以前奥州ノ北方ヲ指テ南部ト稱スベキ證據ナシ是謂ノ説ナリ今南部ト稱スル由來ヲ考ルニ文治五年頼朝卿東征ノ時甲斐國南部庄ノ住人新羅三郎義光ノ末葉南部三郎光行ニ勅賞トシテ糠部數郡ヲ賜テ領知セシム東鑑卷之九ニ南部三郎國行ト出同十五卷ニ三郎ト出ツ三郎ノ説ヲ以テ正トスベシ光行ハ文治五年糠部數郡ヲ領シ建久二年辛亥ノ三月甲斐ヨリ入部アリ其後數

十代ヲ經テ天正年中ニ秀吉公田原征伐以後光行ノ子孫南部大膳大夫信直ノ時陸奥ノ北方十郡ヲ領知ス其總名ヲ南部ト稱セシハ此時ヨリノ事ナルベシ文治建久ノ頃ハ一人ノ領知ヲサルカ故ナリ

○永福寺 三十九

鎌倉志云永福寺舊蹟土籠北方ナリ昔ニ階堂ノ跡ナリ里俗ハ山堂トモ光堂トモ云フ田ノ中ニ礎石今尚存ス俗言石焼石ナト云リ東鑑ニ文治五年十二月九日永福寺ノ事始ナリ奥州ニ於テ泰衡管領ノ精舎ヲ御覽セシメ當寺ノ華構ヲ止テアル彼梵閣等並宇之中ニ階堂アリ大長壽院ト号ス專テコレヲ摸セラルニ依テ別ニ階堂ト号ス建久三年十月廿日嘗作已ニ其功ヲ終フ御臺所御参リトアリ其外池ヲホリ阿弥陀堂藥師堂三重ノ塔御願寺等建立

七

ノ事アリ云云

○平泉圖

四十平泉此郷ノ惣名ナリ今中尊寺村平泉村ト云フハ以テ
里人モ越寺ノミテ平泉トシテ平泉ノ号中尊ニ預ス上思
ルハ誤ナリ

今俗間ニ平泉ノ圖アリ秀衡ノ時ヲ圖字セ圖ナリト云予コレヲ取
テ熟覽スルニ秀衡ノ時ヲ圖スルニハアラス後世里人ノ語リ傳ヘテ
好事ノ者ノ作レル者也如何シテコレヲ知ルトナラバ東鑑ニ中尊寺ニ
堂塔四十餘宇禪房三百餘宇ト云モ越寺ニ堂塔四十餘宇禪房
五百餘宇ト云リ然ルニ其圖ニ堂社ニ今ノ世ニ残レル者ト其跡ノ間々
云ツクモタル者ノミテ圖シテ東鑑ノ數ニ不合禪房モ今ノ兩寺合シテ
三十六區残レルノミテ圖ス又諸士ノ宅地並ニ解井ヲ圖スルト雖モ諸士
名ヲ不著町々ノ名ヲモ不記堂塔ノアリ処ニモタガイアリ是以後世ノ
人ノ名ヲ記スル者アズバ我コレヲ信用セシ○寛保二年壬戌ノ歲神

成ノ畫ニ後素カ圖スル者アリ古跡ノ今ニ存スルヲ擧テ里老ノ傳
ヘラシルシ疑シキヲ闕キ微トスベキニ從フ予採之而不用彼矣

○義經辨慶等之笈 四十一

金華山辨才天堂アリ別當ヲ大金寺ト云寺ニ義經潛行時
ノ笈アリ今世ノ製表ニ異ナリ又秀寄附ノ大般若經アリ
江刺郡片岡村岩谷堂ニ岩屋ノ山多門寺アリ寺ニ鈴木ニ郎重
家ガ笈○膽澤郡上葉場村稻荷山心月寺ニ龜井六郎重清カ笈
アリ○氣仙郡唐丹村山伏大學院ニ龜井六郎重清カ笈ト云ルアリ
又龜井カ墓ト云ルアリイブカシ

義經守ノ舍利鎌倉明月院ノ寺寶ナリ鎌倉志云舍利一粒金塔ニ
入源義經守リノ舍利古河御所ヨリコレヲ納ム金文紗ノ直垂ノ袖
ニ包テ有シテ袖ハ古河ニ残スト云○栗原郡三ノ迫莊沼倉村

跡階堂ニ義經ノ馬具アリシ今ハ隻鐙ノミコレリ又辨慶カ笈アリ
信夫郡丸山瑠璃光山醫王寺ニ義經ノ笈アリ扉内ニ十弟子像
アリ義經ノ自画ナリト云

神社考云駿河國補陀落山久能寺有源義經之笛号薄墨寄
進此寺嘉祿年中回祿笛亦燒失ス

山城鞍馬山ニ義經ノ太刀鎧等アリ

信長記ニ信長卿永祿土年十月攝州芥川城ニ陣ヲ居ヘラレシ時
幕下ニ屬セシ近國ノ面々異國本朝ノ珍寶ヲ取々捧ケシ内ニ古源
義經一谷鐵峯山峯ヲ洛シ時カケラレタル鐙上テ捧ケシ内アリケリト云
愚按寺院堂社稱什畜物ノ妖僧贗巫偽設テ而托名惑人貪
錢物也蓋不鮮少矣看之者可辨其真偽也

○牛若躰長範四十二

日本事跡考云美濃國青野原牛若東行時富賈吉次同往賊首
長範聚徒數十人謀于野夜入吉次宿欲盜其裝牛若拔劍斬之
死者既二十餘人長範腕痿棄長刀遂躰吉次大喜俱赴奥州牛若
源義經之童名也

○源義經之容貌四十三

盛衰記四十一卷義經ハイガノ條云源九郎判官義經ハ色白
シテ成ヒキシ容貌優美ニシテ身祚勇也ト云

○源賴朝之容貌四十四

平家物語卷八征夷將軍院宣ノ篇ニ云院宣ノ御使ハ尤
吏生中原泰定ナリ賴朝其日ハ布衣ニ衣鳥帽子也顔
大キニシテ勢短シ容貌優美ニシテ言語分明ナリト云



平泉雜記卷之四終

平泉雜記卷之五

○駒形嶺一

相原友直著

東鑑卷之九謂兒賴時カ櫻ヲ植シ駒形嶺ハ岩井郡今東山

岩井郡ノ内北上川東ヲ東山ト云川西ヲ西岩井ト云長部山ナリ此山平泉ノ東ニアタリテ高

ク峙キ北ヨリ南ニ連リ聳ヘ山峯嶺秀テ溪谷深ク山村樹間隱

顯シ樵徑羊腸ヲ連ラヌ北上川ノ大河麓ヲ流レテ片帆風ヲ合ミ

野渡人聚テ斜陽ニ對ス南ニ鳥免山ノ奇秀有テ一桂天ヲ敬テ如

シ今所謂櫻樹無ト雖トモ實ニ平泉第一ノ眺望ナリ又此山ヲ多

和志根山ト云西行法師ノ歌アリ

陸奥玉平泉也むつひく多々と孫とヤ山の侍りこも木

をまぐあれたやうう様の限るて花の傍う路は見る

よは見る

ちつしむせはまをそし祇山の様を吾れの外あはる屋とす
 奥也ちつしむ人見は花乃ちつしむあまや尋城らん山布とてあは
 右ノ歌既ニ前載スルト雖トモ駒形嶺ノ事ニ關ルガ故ニ再ヒヨリニ擧ケテ
 右駒形嶺ノ外ニ駒形嶽ト云ル高山封内ニニヶ所アリ俗ニ駒ヶ嶽ト云
 膽澤郡西根村駒形岳ハ神名帳ニ所謂駒形神社ナリ山上ニ社アリ郷
 人物善神ト云馬頭觀音ヲ安置ス御駒山駒峯寺ト号ス西
 ハ出羽仙北北方ハ南部領東南ハ仙臺領ナリ俗馬ノ神ヲソウ
セン神ト云
 栗原郡三迫庄沼倉村駒形岳ハ神名帳ニ所謂駒形根神社ナリ社
 ハ山上ニアリ山下ニモ小社アリ一ノ宮ト云岩井郡五串村ニ跨ル是乃古
 歌ニ朴木ヲ詠ル栗駒山ナリ俗ニ此山須此山北ハ仙北南ハ仙臺嶺
川嶽トモ云
 十リ古歌多シ今一二ヲ擧ケク
 陸奥の栗約山の朴木乃枕をあまこと君り手枕人丸
 六帖

陸奥乃栗約山乃朴木ハ花チリ大和物語
 栗約の山もあまの老川稚子と里もつ里中あけりとあつ物成
 日 ちつしむはは栗約山の麓チリも枕ぬる柳をさひりかたは
 事無草

栗約の松はを以て手物色とナシとあまをを生をさるる
 いそ我栗約山の紅葉を我秋はちりとも起るる見せ
 屏凡栗約山あま人の家子女も紅葉見る所のぶ鈴臣
 紅葉あまの栗約山の夕陰成りて我宿あまの山見ん
 愚按スルニ駒形嶽相隔ツ事不遠シテニツアルヲ以テ膽沢栗原ヲ分
 多トテ栗駒ト云シテ遂ニ和哥ニモ詠セシニヤ
 再按スルニ栗原ノ駒形岳ハ西岩井五串跨リ平泉ノ西ニアリ平泉
 ヲリ奥道二十余里ヲ隔ツ其山突兀トシテ青空ヲ撐ニ残雪皚々

トシテ六月ニ至ルマテ消ルコト無シ人ヲシテ胸襟ヲ涼フシ塵煩ヲ拂
ハシム東鑑ニ東山ノ駒形嶺ノ櫻花ヲ殘雪ニ比シテ四月ニ至ルマテ
消ル事無ト云是墨客ノ常言ナリト雖トモ不能無疑奧地櫻花
假令時節ニ後ルト云トモ豈五月ニ至シヤ竊ニ疑フ當時日記ノ草稿
ヲ潤色淨書スル者其地理ヲ不詳栗原ノ駒形ヲ誤テ東山駒形
ト為シ高岳ノ眞殘雪ヲ誤テ白櫻ノ擬殘雪ニ混スル者カ東ヲ閱ス
時ハ全章栗原ノ駒形ニ不係ト著明ナリト雖氏今眺望ノ壯觀ニ
依テ發疑無用ノ贅論ヲコトニ附スルコト爾リ

○ 義經之臣 二

盛衰記卷之三十六鷲尾三郎經春江田源三弘基熊井太郎忠元
大内維義是義經ノ家臣ナリト云リ同書卷之四十二義經ノ四天王
ト云アリ鎌田藤太盛政同藤次光政此二人ハ鎌田兵衛政清カ子也佐藤三郎兵衛嗣信

同四郎兵衛忠信ナリ同書云九郎冠者義經ノ子郎等ハ奥州ノ
佐藤三郎兵衛繼信弟四郎忠信伊勢三郎義盛江田源藏熊井太郎
大内太郎長野三郎武藏坊辨慶平家物語ニハ以上八人ノ中大内長野ヲ除キ鷲尾三郎義久アリ
義經記ハ小山十郎推頭兼房武藏坊辨慶片岡鈴木三郎重家同
龜井鷲尾増尾伊勢三郎義盛備前平田郎喜三太又曰根尾
駿河常陸坊

愚按ニ片岡八郎ヲ東鑑ニ弘經ト云又弘綱トモ云盛衰記ニ為春
ト云平家物語義經記ニ經春ト云鷲尾七郎ト云雜色駿河次
郎盛衰記ニ鷲尾三郎經春ト云平家物語ニ義久ト云
平家物語ニ義久ト云此外近世流布ノ勲功記鎌倉實記
等ニ郎等ノ名ヲ擧ク信用スヘキアリ採ベカラザルアリ
○ 忠信屋敷 防門三郎附三

依藤忠信宅^{ヤキ}京七條坊門不動堂ノ東南ニアリ相傳フ忠信京都ニ
居ル時此所ニ棲リト今ニ至テ其地耕地種セズ忠信獨ノ勇子アリ成長
ノ後坊門三郎ト号ス九ノ武家ニ在テ坊門ト称スル者多ハ忠信力
裔ナリト雍州府志ニ出

或曰繼信忠信屋敷跡本州米澤ニテリ重テ識ル人ニ問テ訛スヘシ

○橘次ノ井 四

橘次ノ井京西陣五辻ノ南櫻井ノ辻子^ジアリ相傳フ此所金賣橘次未
春ガ宅地ナリト此井大ニシテ水モ亦清冷ナリ義經橘次ガ東行從
テ時此所ヨリ首途^{カド}スト妙心寺南門ノ東ニ水辻村アリ是古官家水
辻ノ領所ニシテ今ニ於テ第宅ノ址アリ土人亦辻ヲ誤テ橘次ト為
ス村中一ツ井アリ又出門水ト号ス是義經首途ノ日ニ用ルル井
ナリト云是皆謬説ナリト雍州府志ニ出

○南廷 五

友直東鑑ヲ考ルニ所載ノ南廷ト云ル物其重寶ナリト無疑ト雖上七始
メ何物ナル事ヲ不知書籍ニ之ニフシテ博ク考ルコト不能地僻ニシテ
博物ノ人ニ就テ之ヲ問ニ便無シ後是ヲ沙石集大和本州和爾雅等
ヲ着テ銀ナラシコトヲ知リ東鑑ニ廷庭ト書ルハ挺錠錠ノ字ヲ略セル事
ヲ知レリ泰衡カ庫中ヨリ出シ重宝ノ中ニ南廷百各盛金器トアレハ金
ヨリ重キ寶ノ如シト雖トモ又同書ニ沙金ノ次ニ記スルヲ以觀ル時ハ
金ノ次ニ列スベキ物ニシテ金器ト云ルハ有合ノ金ノ鉢様ノ物ニ納置夕
ルニヤ又金箔ヲ押シタル器ナドヲ云ルヤ予考テ之ノ後ニ俗説贅辨ヲ
得タリ是ヲ後ニ載ス參々看ベシ○大和本州曰爾雅云銀美者鏐
集韻或作鏐時珍云其美者曰鏐○今國俗銀之美者曰南鏐

貝原翁ノ國俗ト云
ルハ和國ヲサセリ

貝原好古和爾雅云欒挺南鏢同謂銀之美者イタシロコ銀釵

合類節用集云南鏢一名銀釵一名銀錠友直按云損軒先生今國俗

銀之美者曰南鏢ト云ルヲ以觀ル時ハ南鏢ハ日本ノ稱スル所ニシテ中

華ノ書ニ不出事明ナリ字彙ヲ考ルニ挺ハ他鼎ノ切直也鏢ハ連條

切白金之美者ハ人絹切柔銀ハ徒異切金銀ハ錠也ト云

東鑑卷五唐錦ノ端唐綾絹羅等百端南廷三十唐墨十廷

又唐錦唐綾南廷五十卷九南廷百各盛金器卷三十七卷絹十

足南廷一ツ卷三十一御甲南廷卷四十二砂金百兩南庭十羽一箱又

沙金百兩南庭十兩卷四十四南庭十馬一足卷四十六南廷五置銀

折敷ヲ卷四十九南庭置同扇前文ニ銀扇アリ同又南庭ニテ所ニ出卷

五十馬並南庭五劔又生衣ニ南庭三絹三十足又劔南庭ニ按ニ四

南庭十兩ト出テ
外ニ兩ノ字無シ

盛衰記卷之十中宮御産ノ卷ニ御馬十二足砂金百兩南鏢百劔七

振御祈禱ノ御布施ナリ又卷之十四伊豆守仲綱ノ水ノ下ト云ル馬ヲ

宗盛見ニト望ミ引ヨモオキテカエサス仲綱使者ヲ以テ水ノ下還シタマ

口ルキ由ヲ申タリケレバ宗盛水ノ下ス惜テカエサス其代リト覺

シクテ南鏢ト云馬ヲ給ケリ極テ白馬ナリケレバ南鏢ト云ケリ

無住法師ガ沙石集卷之六正直ノ人寶ヲ得タル事ヲ載テ曰ク

近年歸朝ノ僧ノ説トテ或人語リシハ宋朝ニ賤キ夫婦アリ餅ヲ

賣リテ世ヲワタリケリアル時道ノホトリニシテ餅ヲウリケルニ人ノ袋ヲ

落シタルケルヲ見レバ銀ノ軟挺六アリケリ云々

俗説贅辨ニ云東鑑ニ南廷ト云物アリ有職者是ヲ問フ其人秘傳ト

テヤケルハ南廷ハ修禪寺ノ紙ナリ頼朝伊豆配流時修禪寺ノ南

庭ニ於テ沙紙ヲ手ツカラ漉タマフ故ニ南庭ト名ツク秘藏ノ事ナリ

答ノ今按スニ此説珍奇ナリト雖上モ恐クハ非也修禪寺ノ紙平泉物
話ノ首五節ノ舞ノハヤシニ出タリ然レハ由来久シキ事頼朝ニ始ル
テ大東鑑ニ卷絹十疋南延嘉禎御甲駿河次郎泰村南延長并
空門大夫泰秀年三砂金百両南庭十又砂金百両南庭十両建長南延
五置銀折敷年八奉引出物砂金越後守實時南延秋田城介泰
盛正元此類不勝枚舉大概砂金トツカヒ馬絹十トツカフ御引出物ヲ上
ル三人ハ甲ヲ指上一人ハ修禪寺ノ紙ヲサシ上ル事相應ニテラズ決シテ紙
ニテアツナルベシ按スルニ銀ノ美ナル者ヲ南鐮ト云今出羽人金ノ餅ヲ錠ト云
南鐮ノ餅ト云ヲ略シテ南錠ト云カ延ハ錠ノ偏ヲ略シテ書リ故實トナリテ
延上モ書ナルベシ東鑑進物中南延之外ニ銀無シ南延乃千銀ナ
事ヲ知ル古キ武士ノ家ニ純銀ノ錠一枚アリ徑二寸八分四方ニシテ四ツノ
角ヲ二分ツノ殺ク厚一分桐ノ刻印口レアリ四ノ角表裏ニ少輪内ニ桐紋

ノ刻アリ表ノ中ニ花降ノ二字淺ク彫テアリ重四十三匁アリ是古所謂
南延上云者ハ如是ナル者歟友直コレヲ或人ニキク銀三四品ノ位アリ上品トシテ其次ヲ花
降其次ヲシバフキ其次シバフキ其次ヲシワフキト云ト諾リキ
是ヲ博クタツ子問テ實否ヲ決セマホシケレド寒郷其人無シ
故ニシバラクコトニ記ノ他日ノ考索ヲ俟ツコトナリ

○衣川ノ歌六

昨日をち今日をちすえ衣川の裾の錠のけのあるある
此歌俗間ニ傳ヘテ人口膾炙シ来レリ予一日南部根元託ト云元寫本
ノ書ヲ見ル天正十九年奥州九戸丸進將監政實ト云者逆意ニ依テ
同年六月秀吉公ノ下知トシテ九戸征伐ノ大将ハ蒲生氏郷其外
諸軍勢下向アリ同九月政實誅戮セラレ諸軍凱陣アリ十月上旬
氏郷ハ九戸ヲ發足シ岩井郡衣川ヲ通りケル時糠部ヨリ召ツレタ
千人夫ノ中ニテ衣川ヲ經ノノボルヲ見テ右ノ歌ヲ口スサシケル此
事遂ニ氏郷ニ聞ケレハ彼者ヲ召出サレヤサシクモ仕ル者カナト稱美

セラレ青銅ナド給リテ是ヨリ故郷へ帰ルベシト暇ヲタマハリ帰レリトアリ
予讀之テ右ノ歌ノ出所ナリト思ヘリ其後藻塩草ヲ見ルニ絹川歌ナリ
きよのふらちる日あまのくれハ絹川の裾の綻さけのやも也

紫萼藻塩草ニ載ス彼ノ者人ノ吟ズルヲ聞オホヘタルニヤ又コレヲ偷テ絹
川ノ文字ヲ換テ吟シタルモイトヤサシトヤイトハシ藻塩草ニ其出所ヲ不
文字ヲ換テ吟シタルモイトヤサシトヤイトハシ藻塩草ニ其出所ヲ不
何レノ書ヨリ採ルコトヲ知リカタシ又家ニ畜ル書籍ノ乏シケレバ
廣ク考ヘ索ント欲スルニ便ナシ依テ思フニ此編ノ如キ稗説ノ片藉ニ
テ人ノ一覽ニ不足モ予カ如キ謬劣ノ暨ブ竹ニ非ズ其微ヲ取ニ暗フ
シテ人ヲ誤ラシメシ事雖然古來口碑ニ残レルヲ記シトメズハ後
ノ予ニ似タル僻アル者其事ヲ尋又ルニ便ナカラシ是予ガ杜撰ノ
笑ヲ待ツ所ナリ右ノ歌ニ載スルニ不及コトナリト雖ドモ其由ヲ不知

者ノ為解惑舉之者也

○中尊寺焼杉七

焼杉ハ中尊寺鎮守白山宮ノ傍ニアリ此樹四丈八尺アリシガ今ハ幹
モ梢モ枯朽ウツホ木トナレリ枝條少シ残テ猶緑葉ヲ存ス郷説ニ昔本
州南部ノ南宗房ト云シ僧手カラ植シト云近世此秋根ヲ香ト為
シ香會ニ用ヒ雅玩ト為トカヤ 中將吉村公道奥ト名ヲ命シタマヒシ
トカヤ未タ其實否ヲ不知南宗ハ本州南部ノ産ニシテ康元年
中ノ人ト云リ慈氏菩薩ノ下生ヲ待トテ鹿角郡十和田沼ニ入テ蛇
ト変ジ今ニ水底ニ居テ種々奇異ノ事多シト南部ノ故人語り
南宗カ支子所傳ヲ
書ニテ別ニ小冊ト為ス

○白旗大明神 八

義経ノ首平泉ヨリ恭衡ガ鎌倉ニ送リタルヲ腰越宿ニテ義盛景

時實檢ヲ逐シ事ハ東鑑ニ出タリ其後相州白旗里大磯平塚向ニ瘞ウツ社ヲ建テ白旗大明神ト祭レリ社今猶アリト云一説ハ藤沢ニ瘞ト云按スルニ里ヲ白旗ト号セシハ首ヲ瘞ミシ以後ノ名ナルニヤ辨慶ガ墓モ祠前ニ杜ト云東鑑ニハ辨慶ガ首ノコトハ不見後ニ併セ祭レシヤ伊賀國伊豫大明神社アリ源義經ノ靈ヲ祭レリ鎌倉志云頼朝社鶴ヶ岡ハ幡宮ノ西方ニアリ白旗明神ト号ス社内頼朝ノ木像尤ニ住吉右ニ聖天ヲ安ス頼家創立也○又報恩寺ハ永和二年上杉兵部大輔能憲建立ニシテ開山ハ義堂ナリ此寺滅ビテ今其跡アリ此寺モ昔白旗明神社アリ寺滅ビテ社モ亦亡フ義堂祭白旗神ヲ文アリ其略云應安六年歲次癸丑冬十月十五日南陽山報恩護國禪寺白旗大明神靈祠成ルトアリ事ハ鎌倉志ニ詳ナリ愚按スルニ鎌倉ノ白旗明神ハ頼朝公ヲ祭レリ頼家ノ創立ト云義經

頼朝ヨリ先ニ死スルト雖氏其白旗ト崇メシハ何レカサキナルコトヲ未詳之平泉高館ニ義經堂アリ古來館跡ニ義經ノ墳墓アリテ石アリ俗義經腰ヲカケテ自殺セシ石ナリト云石ノ上ニ祠堂ヲ立ルト云天和三年癸亥ノ歲前太守細村君祠堂ヲ建立ナサシメタマフ祠堂上梁文次ニ載ス天和三年ヨリ五十年前ノ頃マデ祠堂アリシト故老ノ聞傳ヘナリトカヤ近世白旗大明神ト号ス義經甲冑ノ像アリ寶曆年中ノ造立ナリ又古キ像ヲ再興ストモ云愚按スルニ盛衰記卷ノ四十三云義經ハ面長フシテ身短ク色白フシテ齒出タリ身スボウシテ能鎧ヲ不着ヨリ朝夕物ノ具ヲ換エトアリ本像ノ事ニ就テ其容貌ヲフニ載ス勲功記ニ容貌ノコトヲ詳ニ記スルト雖氏我不信之

○義經廟上梁文 九

天和三年故太守細村君ノ御時郡司河東田長兵衛定恒平泉ノ衆徒

ト相議シテ高館義經ノ墓上ニ祠堂ヲ建立セシコトヲ太守即太守
命之一字ヲ創立セシム其時上梁ノ文松島瑞岩寺通玄和尚書之
陸奥州高館者源氏義經故城也經薨後遂作荒墟天和年
中當州太守仙臺羽林細村公家臣河東田氏長兵衛定恒來治諸
郡之次登此山訪遺塵寒煙蔓草四顧荒涼故老相傳五十年前
此地有靈祠定恒慨然而歎曰義經者大將軍賴朝公令弟其軍
功威名市暨街童無不知焉豈有不封尺寸地剪一莖茅而
安厥神靈乎即千與平泉衆徒共議之而白公太守命之草
創一字以鐵瓦葺之其人咸號之曰義經堂其功其德雖專歸
太守原厥濫觴實出自郡吏定恒之善心善心豈可不獲
善報乎可嘉可尚仍賦一偈充上梁文偈曰
以平等心爲基址 靈廟新成輪奐美

俎豆來藻川漣漪 簠簋高館城蒼翠
焜蒿悽愴如見之 勿疑台靈垂光賁
蓋代功名昨夢白 從前汗馬總兒戲
假令四海鬪英雄 爭似早出離生死
血流漂鹵古戰場 純白蓮華捧雙趾
我有一卷了義經 天龍八部常側耳
幸是猛烈大丈夫 降伏魔軍超佛地
大切德主奥州刺史僊臺羽林伊達英曹藤原朝臣細村
公天和第三癸亥年十一月七日松島山下比丘通玄達
敬識

○中尊寺村平泉村之說十

今中尊寺村平泉村トラビテニケ村ナリ按スルニ中尊寺清衡

建立以後ノ名ナリ平泉ノ内ナルベシ今ニケ村ニ分ツ後世檢地ノ時平泉村廣キヨリテ中尊寺ヲ分テ一村トナシタルヤ古書ニ平泉ト云ハル中尊寺ヲ分サル前ノ事ト見ヘタリ故ニ予古書ノ説ニシタガイ中尊寺ヲモ平泉ト書セリ今讀人可知之ナリ

○關山中尊寺之號 十一

關山ノ號ハ山下ニ衣關アルニ依テ名付ル事分明ナリ中尊寺ノ號ハ清衡奥六郡管領最初ニ下野陸奥ノ境白川関ヨリ外濱ニ至ルマテ廿餘ケ日ノ行程ニ所ゴトニ笠卒都婆ニ金色ノ弥陀ノ像ヲ圖繪シテ立シ時此山白河関ヨリ外ヶ濱マテノ中央ナルニ因テ山ノ頂ニ基ノ塔ヲ立テ佛像ヲ安置シ中尊トセシ古文明カ也而説共ニ東鑑ニ因テ愚按ヲ書ス東鑑ニハ衣川柵ハ安倍頼時國郡ヲ掠メ領スル昔家屋ヲ構フトアリ前太平記ニハ衣川関ハ

貞任カ曾祖父安倍忠頼六郡ヲ押領シテヨリ以来八十餘年此城ニ居住スト云リ然ルニ續日本紀桓武帝延暦八年ノ條ニ衣川營ノ事アリコレヲ以テ考ル時ハ衣川營ハ往古ヨリアル所ニシテ衣川館カ衣川柵カニテ所ノ中ナルベシ頼時カ衣川柵跡ト云ハル衣川ノ川上ニテリ東鑑ニ高館ヲ衣川館ト云ルヲ以名迹志ニ頼時カ衣川柵ノ同所ニアラザルコトハ東鑑ヲ考ル時ハ分明ナリ館ト柵ト別ナルコト予既ニ前ニコレヲ辨ス或説ニ今膽沢郡白鳥村ニ衣關ノ跡アリ其傍ニ關山明神アリ今關門宅ト云是乃昔ノ衣關ナリト云愚按スルニ此所中尊寺ヲケツコト奥道十八九里アリコレヲ以衣關ニアラザルヲ知ルベシ往昔白鳥村ニ別ニ關ヲ構タル跡ニシテ衣關ニアアラザルベシ

○津輕人魚 十二

十

東鑑三十八三憲治元年五月十日陸奥國津輕ノ海辺ニ大魚流レ
寄ル其形備二人ノ如シ先日由比ノ海水赤色ノ事若此魚ノ死
カ故力諸人諸人音吉由比濱潮色変シ赤メ血ノ如シ隨テ同シ頃奥州ノ海浦波
濤赤シテ紅ノ如シ此事ヲ古老ニ尋ウル所ニ先規不快ノ由コト申ス
所謂文治五年ノ復此魚ニ同キ事有テ泰衡誅戮セラル建仁三
年ノ復又出羽ノ秋田ニ流レ來ル九金吾賴家御事アリ建保元年
四月出現シテ同五月ニ義盛ガ大軍殆ト世ノ御大事タリ云々同示
九卷ニ憲治二年十月十五日陸奥國留守所住申テ曰去又九月
十日津輕海辺ニ大魚死テ浮テ寄ル人ノ狀ノ如シト云云此事先規
ニ箇度ナリ皆吉事ニアラザルノ間留守斟酌ヲ存シ子細ヲ申
サルノ所ニ風聞ノ説ニ就テ之ヲ尋下サル
愚按タルニ史記ニ人魚ノ膏ヲ以テ燭トセシ事アリ其諸註ノ説東

鑑ノ人魚トハ別物ナリ又本草綱目鯨魚ノ條ニ和名神録
徂異記ヲ引テ人魚ノ事ヲ載ス東鑑ノ人魚ト同物ナリカ鯨
魚モ亦人魚ト云ヘト名ハ同クシテ別物ナリ貝原翁ノ大和本
冊ニ人魚ノ事ヲ載ス日本紀二十卷ヲ引台推古帝二十七年櫻
津國有漁父沉罟ヲ於堀江有物入罟其形如兒非魚非人
不知所名今案此魚本邦所ニ稀有之亦人魚ノ類ナルヘト云
リ又松島天嶺和尚幼少ノ時人魚ヲ見ル外々濱ノ漁人網
ニテ取タルヲ把ト來ル食物本草ニ引ル処ノ徂異記書ル所ト此
ノ差無シ兩ノ肘ノ後紅ノ鬣長一尺有餘ナルアリ兩手無鬣
髮赤黃面色青黒ナリ女兒ノ如シ男子ニアラス其年頃
十二三バカリ言語セズト著ス所ノ燕南紀譚ニ記ス

○白山社祭禮式十三

白山権現ハ中尊寺一山ノ鎮守也社内ノ宮殿高六尺ホド横三同
之奥ユキ一尺六寸餘其後ニ焼印アリ宮殿建立徳治三年大
檀那法橋實源ト託ス神體ハ昔ヨリ秘シテ不許拜見之本
地佛
十一面觀音慈覺大師ノ作宮殿ノ外ニ安ス○祭祀毎年四月初
午未兩日ナリ午ノ刻ニ宮殿ノ内ニ山吹ノ枝葉共ニ長一尺ホドニテ
一束ヲ納ムルニ獅子舞アリ次ニ御一箇馬一山ノ内ニテ七歳ノ男子
ヲ選ミ三七日縋齋ヲ為サシメ將袈束ヲナサシメテ腰ニ葦葉ヲ挟ム
飾ル馬ニ乘丸口附ノ者兩人笠ノ上ニ日月ヲ造リ立テ戴ク供奉
六人皆造リ花ヲ立タル笠ヲ戴ク長刀木大刀脱沙兔ヲ持ツ金
堂址ヨリ乗出シ白山社前ニテ馬ヨリオリテ笠ノ造リ花ヲ四方ニ投ス
ツル馬ヲ急ニ牽還ス此馬嘶時ハ凶ナリト云次ニ田樂胡桃木ノ皮ヲ以テ
ニ尺餘ニ方ニアジロヲ組ミ平ラカシテ四辺ニシテ下ケ上ニ造リ花ヲ立テ笠

ノ如ニ頭ニ戴キ大鼓ヲ首ニ懸テ敲ク者アリサヲ持テ鳴ス者アリ都テ
八人樂屋ヨリ笛大鼓ヲ以テウチハヤス拍子ヲ踏テ躍リ舞フ次ニ開口老翁
ノ假面ヲ粧ヒ將袈束ニテ山ノ縁起風景ヲ稱美シテ立テカテ東西南北
ニ向テ唱フ次ニ祝詞ハ家冠將袈束ニテ幣帛ヲ持テ白山宮ニ向テ山
ノ由來ヲ演テ天下泰平國家安穩五穀成就國守ノ息災ヲ祈リ
當日參詣ノ者マテ息災福壽ヲ祈ル次ニ若女ノ舞若キ女ノ假面ヲ
粧鈴ヲ振扇ヲ以テ舞フ次ニ老女舞老女假面ヲ粧ヒ腰ヲ屈メテ鈴
扇ヲ以テ舞フ次ニ能數番一山ノ衆徒各其役ヲ勤ム

○農民得金玉 十四

寶曆九年己卯ノ春平泉ノ農民花館ノ正七ト云ル者田ヲ耕ス田畔ニ
壺ノ埋タルガアラワレニエシヲ多年石ナリト思ヒ打過キケルガ一日掘
取テ捨ント先ヅ鑿ヲ以テ敲キ試ルニ破レ碎ケタリ是ヲ者ハ石ニハ

石ニアラスシテ壺ナリ掘出シテ見ルニ内ニ灰ノ如キ沙アリ沙中ニ玉
黄金トアリ玉ハ週リ二寸ホド丸クシテ白ク清キエト譬ハ荷葉上ニ水
ヲ包ミタルガ如シ金ハ柳ノ核ナドノ形ニ似テ大ルアリ重ニ數餘厚
三四分ホド色黄赤ナリ壺ハ二升餘ヲ納ルベシ蓋ハ無シ藥ハカリタ
レドモ砂肌ニ似タリ或人見テ行基焼ナリト云ルトゾ以上ノ三種乃チ
國主へ捧ク其所ハ金雞山ノ東南ニシテ往昔ノ新熊野社ノ跡
ナリ七八十年以前ニテハ社ノ礎石モ残りテアリシヲ堤ヲ造ル時土
手ニ築篋タリト云リ堤ト云ハ郷俗耕種ニ用ル水ヲ貯ル池ヲ云土手
トハ乃チ池ノ四邊ノ堤ノ支ヲ云ル方言ナリ

○安倍家系 十五

東鑑云安倍賴時本名類義也男子者井殿盲目厨河次郎負任鳥海
三郎宗任境講師官照黑沢尻五郎正任白鳥八郎行任等也

女子者有一乃末陪中一乃末陪一乃末陪也以上八人男女子宅並並
云又千代童子ガコトヲ載ス

前太平記曰安倍忠賴其子忠良其子賴時初名類良其長男ハ早世ス
厨河次郎大夫負任鳥海三郎大夫宗任黑沢尻四郎正任磐井五郎
家任比浦六郎重任比與鳥七郎則任女子ハ直理經清ガ妻伊具平
郎永衡カ妻ナリ負任ガ子千世童子
蟠籠子俗説辨ニ引安倍家傳曰神武天皇イマダ中國ニ入タマハサレタ
宇麻志摩治命櫻洲ヲ領シ膽駒嶽ニテ十餘年相戦フ終ニ神武帝
討勝多ク爰ニ長髓彦ト云者帝ノ御兄ヲ討タル故ニ此時誅セラレ
彼ガ兄安日ハ東國ニ追放セラレテ津輕ニ住ニ卒度濱安東浦ヲ領
ス三十八代齊明帝ノ御宇ニ蝦夷日本ニ襲來セシニ帝安倍比羅夫
ヲ將軍トシテ差向ラルトイヘトモ每度利ヲ失ヘリ此時安日ガ末葉

ニ安東ト云者アリ比羅夫が陣所ニ來リ告_レ云我ハ是安日か末葉ナリ
往昔安日神武天皇ノ勅勅ヲ蒙リテヨリ今ニ至ルマデ赦免ナシ願_ハ
先祖ノ罪ヲユルサレ先鋒ヲ給_ハ蝦夷ヲ討退ベシト請_ヒル比羅夫
コ_レヲ奏聞シ勅許アリシカバ安東ヲ先鋒トシテ終ニ勝_リテ得_タ
リ比羅夫安東カ功ヲ賞シテ安日トモ書ス其後蝦夷又乱ヲ起_セ
シニ安東カ末孫致東是ヲ討_チシツム其賞トシテ將軍ノ號ヲ賜_フ
六十六代一條院ノ御宇ニ蝦夷襲來セシヲ致東カ末葉國東松
前_ニ到_リ上道下道ヨリ向_ヒテ數百人ヲ討殺シ其魁_ヲ看_シテ
歸_ル國東カ子頼良其子安東太郎頼良後ニ頼時ト改メ自_ラ安倍
將軍ト稱_シ奥羽ニ州ヲ押領ス八男三女アリ嫡子日井ハ七目目ナリ
安東太郎良宗三男厨屋川次郎貞任四男鳥海弥三郎宗任五男
境_ノ講_師宮_照義經記云境冠者龍相六男黒川尻五郎正任七男重任_不知_八男

白鳥八郎行任女子ハ有加乃末陪中加乃末陪一加乃末陪ナリ貞任
ハ南部盛固厨屋川ニ住シ其威強大ナリ後冷泉院ノ御宇康平五年源
頼義義家勅ニ依_テ奥州ニ發向シ頼時貞任ヲ討宗任ヲ虜_ニス貞
任カ嫡子十世壽丸陸奥話記作十世童子十三_ニテ父ト同時ニ戦_ヒ死ス二男高星
三歳ナリシヲ乳母抱_テ津輕藤崎ニ遁_レ後ニ藤崎ヲ領セリ貞任カ
兄安東太郎良宗ハ子細有_テ同罪ヲ遁_レ末葉代ニ相續_ス良宗高
繁昌_シテ安東安倍秋田藤崎ナト_ト号_スス紋ハ獅子牡丹後ニ檜扇ニ真羽元亨二年良
宗カ後胤安東太郎亮勢ト云者北條高時ヲ背_キケル故相模入道
楠正成ヲ遣_テ亮勢ヲ討_シムルニ安東戦_ヒ貞_テ津輕ニ退_クト記セリ
南朝記北條九代記等ニ記セリ以_テ倍說辨廣益俗說辨多田五代記
ニ安倍忠頼ハ八皇第八代孝元天皇ノ後胤ト記セリ

○駿河次郎 十六

鎌倉志曰固瀨村ハ腰越村ノ西ナリ河アリ固瀨川ト云駿河次郎清重
戦死ノ所ナリ○笈焼松尾瀨村ノ西方民家ノ後竹ノ敷ノ際ニアリ駿河
次郎清重笈ヲ焼シ所ナリト云

○辨慶之氣質 十七

武藏坊辨慶ハ智仁勇ヲ兼タル行迹多シ義經ノ好色ナルヲ度々
イサメケリ奥州落ノ時北方ヲ辨慶スシテ供イダシケリ然レモ皆人
ノ同心スシマシキヲ兼テ計リ知ノ間ハ先ツ辨慶氣色ヲ具シ奉ルマシキ
由ラ云ヒテ後又氣色ヲヤハラゲサハ申シツレドモ正シキ北方ナリ身モ
ナラス鎌倉殿ハタノモシケナシ京ニ殘シ奉ルベキ義ニアラズ行ル所
マテ行テ叶ハヌ時ハ先ツ北方ヲ刺殺シ奉リテ各自害シ玉フベキ
ヨリ外ハアルベカラズトテ兒ノ形ニ作りテ相具シ北陸道ヲ經テ落
ケラレシニ瀨所々々ニテ義經ハ知レタレドモ打トメテ軍功ニモナラジ實ハ

兄弟ニテマシマセバ恩賞ヲ得テモ快カラズ其上罪ナキ人ノ大功アリナカラ
詭ニアヒタマヘルモ痛ハシク進マサル氣色ヲ辨慶ヤガテ見知テ関人
々ノ理ノタツベキ様ニ云ナシテ通りケリ然ルニ平泉寺ニテ法師ノ身ナ
ラ義經ヲ打留シト取コメタレバ遁レサル処ノ第一ナリシカル処ニ美シキ
兒ヲ相具ハシ出ルニ坊主トモ目ウツリシテ時刻ヲウツス彼是スル間ニ管
絃ヲ催シ兒ハ簫義經ハ笛ヲ噓タマヘバ衆徒ノ心モヤハラヤ漸クニシテ
難ヲノガレタリ北方マシマサズハ逃レガタキ難義ナリ天性仁ニシテ
勇ナル故敵ニ怖レヌ而已ナラス唯ニアイテモ心屈セズ吉ノ山ニテ行状
ナドモ心底ノ智仁勇ノアラワレタル事ノミタシ集義和書

○辨慶筆跡 十八

撰州湏磨寺ノ寶物ノ中ニ辨慶ガ筆跡トテ古キ制札アリ其文章曰
此花江南所無也 一枝於折盜筆者

任^セ天永紅葉之例^ニ伐^ハ一枝^ヲ可^ク剪^リ一指

壽永三年二月二日

一書曰辨慶ハ廣才ニシテ智慮フカシ行狀三十人知レリ清貧ニシテ
今ニ残^ルル文書多ク、鑑馬武具等マデ借用ノ狀ナリ
一鎌倉實記ノ作者評辨慶曰辨慶ガ武勇天下後世ニ至テ童
子婦人マデモ辨慶ト称ス此亦其實無キ支アルベカラズ然レトモ
義經起兵ノハシメヨリ今日ニ至テ辨慶ガ勇力武功ノ事實ヲ記
シタル實録ヲ不見博識ノ人ヲ俟テ疑ヲ可敬也

○和漢三才圖會說 十九

三才圖會ニ平泉中尊寺達谷ノ事ヲ書スル事甚誤レリ此書ノ作
者東鑑ナドノ正史ノ說ヲ不考シテ文盲ナル廻國僧ナトノ談話ヲ
聞テ書タルニヤ其所ヲ見且正史ノ說ヲ考バ甚殘心ナルベシ仍テ思フ

予平泉實記ヲ書スル時或人ノ話ヲ聞テ大關山ノ事ヲ書スルトテ
今宿村ヲ金森村ト書シ予住寺ヲ予住寺ト書ケリ後行テ見ルニ
今宿村ハ山ノ麓ニテ予住寺ハ山ノ嶺ナリ此所無耶ノ關ナリ無耶ノ
觀音堂アリ予住寺ト云小寺アリ予誤レル事ヲ後悔ス三才圖
會ノ作者モ定テ其誤ヲ知テハ不可無遺憾又予平泉實記ヲ著
メ門人橋本某ニ京ニ登セケル橋本某野屋八郎兵衛ニ相談シテ板
行セシメ成テ板本五部ヲ贈ル其書ヲ見ニ予ガ指圖トハ甚夕
違ヒ不宜手跡ニテ細字ニ書繪モ趣意ヲ違予ガ序文モ不宜手
ニテ書且橋本予ニ相談モセズ序文ヲ載タリ其文吟味モトケズ捨
ラキ又ルカ近年友人ノ京ニ上リケルニ彼序文ヲ刻リ捨シテラ京都ニ
去遺シヌセメテ予ガ氣ニ合サル事共ヲ朋友ニ告知ラセント如斯シ
那波師曾ノ序アリ播州ノ人ニテ與藏ト云ヘル儒者ナリト云今京

居レリトカヤ橋本カ明友ナリ

○蝦夷風土考之說 二十

蝦夷風土考ニ云義經ヲ崇敬ト云ルモサタカナラズ彼土淨瑠璃内
ニ義經幼歳ノ片小舟ニ乘テ蝦夷地ニ來リ八面大王ノ娘ト通ス大王
狩ニ出シテ窺ヒ秘藏セシ虎ノ巻ヲ盜取リ亦小舟ニ乘テ本邦ニ逃
奔ス大王將ヨリ歸リ追ケレバ津輕ノ地ニ暴風ニ吹戻サレタルト
云事ヲ作りタリト云ヘリ或筆記ニ東夷タルト云所ニ義經ノ宮有テ
今ニ至テ祭急タラス此近郷ノ夷人モ崇敬スト云一リ亦武者狃カ乱ノ
時ニ出タル鬼ヒシモ則クルノ夷人ナリト云凡尋訪スルニ曾テ其又鬼ヒシカ
村ハサルト云所テ山中ニ鬼ヒシカ住シ山窟有ト傳レトモ義經ノ宮
ハ無リシナリ亦蝦夷地六條ノ間ト云所ニ辨慶崎ト云所有義經曼
ヨリ北高麗ノ渡リタマフト雖此亦證據モナシ亦東夷ニ歛サキト云

フ者アリ義經ノ歛形也トテ宝物トシ崇敬ノ夷モ有之由ナレ凡是亦
源公ノ甲ト云ツヘキ明徴モナシ唯土俗ノ言習シタル事ト聞エ古
昔奥羽合戦ノ時敗蹟ノ士卒多ク夷ニ奔竄シケル夷ヲ欺キ英雄
ノ名ヲ借テ威推ラ張タルモ有ツベシ當今夷土ニ兵具ノ有ハ本邦ヨリ
渡リシモノニ非ス右敗卒凡ハ兵器ヲ殘遺ニ云ヘリクワサキト云ハ歛ノ形ナリ
容テ廻リニ巴ヲ彫刻ス即チ本邦ノ歛ノ柄無キ物ナレバトテ松前ノ
人歛サキト云習ハセリ是又蝦夷ノ造作ニ非ス曾テカラフトヨリ渡ル
ナラントナリ此器倒懸スレハ申ノ歛形ノ体ヲナス故ニ源公ノ歛形ト附
會シタル後説ト聞ユレ凡夷俗ノ崇敬神佛ニ等シ此土稀ナル物故家
藏ノ夷ハ深ク秘シテ珍重ス源公ノ事ヲ蝦夷言ヲキクルニト云ヘリ此淨
瑠璃何ノ片如何メケルヤ此文句一ニ翻譯ヲサハ夷ノ情狀ヲ知ヒシ
右蝦夷風土考ニ載凡土考ハ紙數十四五張有テ松前ノ事ヲ詳記

セリ宝曆二年壬申ノヨリ作ナリ誰人ノ作ナルヤ一知レズ寫本ナリ

○塩竈之鐵塔 二十一

塩釜大明神樓門ノ西ニ藤原秀衡ガ三男泉三郎忠衡奉納ノ鉄塔有リ扉ノ上ニ日月ヲスカス文字高ク浮字ニ鑄付タリ

奉寄進

文治三年七月十日和泉三郎忠衡敬白

カク全トク左右ノ扉ニ在リ

○豊田城趾碑 二十二

此地也東西又十七步南北三十九步在管巨理権大夫經清所城也經清戰死平泉之役以其子權太郎清衡有勤王之勲乃封奥之六郡復屋之當此北上川在城之邊浮梁之橋今存東地有高水寺址東南有鎮固祠白旗池俱事詳封内風土記多歷年所

人不知之立碑以傳焉

藩儒田邊希元撰

近戸三井親和書

江刺郡餅田邑人建之

安永三年四月十五日

○豊田館 平泉館附 二十三

藤原清衡ハ奥州平均ノ後陸奥出羽ノ御領使トシテ鎮守府將軍ヲ兼シ
×眞任ガ領セシ奥ノ六郡ヲ領知シテ江刺郡豊田ノ館ニ居住シ兩國十七万
騎ノ母貫首タリ嘉保年中 東鑑ニ康保ト云エルハ誤ナルベシ嘉保
四年ニテ改元ハ四ノ舞ノ内ニシ 豊田ノ館ヲ磐井
郡平泉ニ移シテ奥ノ御館ト稱ス

愚按スルニ巨理権大夫經清ハ巨理郡ヲ領シ氏トナシ其地ニ居住スルニ
ベシ安倍頼時カ女ヲ娶ル眞任ニ組シテ康平五年頼義將軍ニ誅セ
ラル經清死後其妻ヲ清原武則娶テ妻トス懷中ニ三歳ノ子有是清

衡ナリ武則養育ス後ニ將軍三郎武衡同四良家衡ヲ産公是清
衡ト異種同母ノ弟也一説ニ荒川太郎武貞経清カ妻ヲ妻トナスト云ハ誤ナレハ三郎
同四郎ト名付ルヲ以テ考レバ武則カ妻トスル一疑ナシ武則此
時鎮守府
將軍トナリ清衡ハ成長ノ後出羽ニ住ス義家將軍永保三年八月奥州

下向ノ時清衡出羽ヨリ出迎奉ル其後義家武衡家衡ト合戦ノ時

清衡一族ヲ引卒シ出羽ヨリ出張シ義家ニ加勢シ遂ニ武衡家衡

ヲ伐ス寛治六年義家將軍清衡ヲ出羽奥州ノ目代ニ残シ置キ

帰洛ノ時奏聞シテ出羽陸奥ノ押領使トナシ鎮守府將軍ヲ

兼シメ豊田ノ館ニ居住ス清衡ガ生レシ康平四年ヨリ兩國押領使トナ
リシ寛治六年マデ三十二年ナリ

○再按スルニ陣ケ罔蜂ノ社ハ頼義將軍ノ陣場ナリ其所ハ幡

宮ヲ建立ス故ニ土民ハノ社ト称セシト云東鑑ニ蜂ノ字ヲ書シハ

誤ナリト南部ノ老人ノ云シナリ頼朝卿モ此陣ケ罔ニ逗留シテモ

事東鑑ニ見エタリ豊田館跡碑文ニ鎮ケ罔ト云ルハ陣ケ罔トハ

別所ナラシカ○高水寺ハ仁皇四十八代稱徳天皇勅願ニテ長一

丈ノ觀世音ヲ諸國ニ安置シ玉フ所ノ隨一ナリ清衡走湯遊現

大道祖ヲ勸請シテ鎮守トナス山上ニ清泉アリ寺ヨリ高キ事

数丈故ニ高水寺ト云碑文ニモ又高水寺ノ舊蹟アリ清衡

志和郡高水寺ノ觀音ヲ移シテ安置セルニヤ故ニ高水寺ト

號スルカ其後觀音ヲ又舊地ニ移セルニヤ今高水寺南部盛岡

一移セリ觀音ハ舊記地ニアリ

○中尊毛越兩寺之鐘二十四

中尊寺毛越寺其外鐘樓ノ跡ト称スル所処々ニ在リト錐凡鐘ハ有

事無シ世遠フシテ失タル成ベシ亦圓隆寺ノ後之高山ヲ鐘ケ嶽ト云

昔此山頂ニ鐘ヲカケテ兩寺ノ僧徒集會ノ時鳴シケルト云リ亦

説ニ軍備ノ為ナリトモ云此鐘モ今ハ無シ

或説ニ仙臺虚空藏堂ニ今有処ノ鐘平泉ヨリ出タリト云此説
虚實信シガタシ

中尊寺ニ鐘有此鐘ハ七十三代堀川帝ノ御宇清衡中尊ノ堂社寺
院建立ノ後二百三十三ケ年ヲ歴テ九十六代光嚴帝ノ延元二年堂
社炎上ノ後西谷坊ノ經堂光堂ハコレリ七ケ年ヲ過テ九十七代光明帝ノ康永二年癸
未頼栄法師西谷坊ノ先祖ト云是ヲ造レリ序銘有リ前ニ詳ニ載ス

和漢三才圖會ニ此鐘櫻町河ヨリ出セリト云ハ虚説ナリ圖會書
中尊平泉ノ事ヲ書スルニ都テ妄説多シ採ルニ不足○康永二年ヨリ
今安永九年庚子至テ四百三十八年ナリ

毛越寺常行堂ニ今鐘有リ室永年中里人ノ建立ナリ

○金史別本之説 二十五

範車國大將軍源光録義鎮者日東陸華仙摧冠者義行子也始

入新羅鞞部為千戶邦判事身長六尺七寸性温和而勇猛才思
甲諸部外夷多隨拜入學館辨禮義後遷咸京録事監宗
詔轉光録大夫累任大將軍久守範車城押北方往昔摧冠者
東小洋藩君章宗顧厚賞定總軍曹事官合入北嶺不日破蘇
歎得印府翻來屬幕下築範車護焉傾侵北天渡龍海得一
島山河麗奇而悉金玉也民知煎靈草少食五穀屠生肉甚
嫌故無邪煩老仙伊香保行辰行本命法儀相無異恠德
勝故人義行歸越尊敬得長壽後遊中華隱顯更不定
右鎌倉實記載所也余先此書中此文ヲ譯テ論ヲ加テ
今亦本文ヲ見ニ事ヲ欲スル人ノ為ニ書ス于此

○負任宗任詠 二十六

衣河柵敗テ負任宗任等東北ヲサシテ走行タル時義家追カ

カガキの館を居て後びちりり上吟ジタタテ六負任年成
應一系乃みざれ乃若くはに上答エケルト云リ又宗任
囚人トナリ京都ニ在リケル時若キ人梅ノ華ヲ手折テ是ハ
何ト云ゾト見セケレバ宗任系出の梅地花と見之れ
ともおふみや人を何といふらん上答エケレバ人詞無
テ帰リケルトナリ

右前太平記ニ見エタリ世ニ負等ハ情モ知ラ又荒夷ヤウニ
思ヘ凡如北和哥ノ道ヲモ心懸タルト見エタリ

○平泉舊跡方角里数 二十七

予先ニ平泉舊跡志ヲ著ス其方角里数ヲ不記然ニ大槻清雄悉
舊蹟ノ方角町数ヲ尋記テ以後世ノ遺忘ニ備フ其志週切ナ
リト謂ツベシ今則請之舊蹟志ノ末ニ附シ又雜記ニ附シテ回志

ノ人ニ與フ其間数里数ハ圓隆寺池ノ南南大門ノ入口東南ノ角
礎石ヨリ四方四隅ニ計リ始ムト知ベキ也

○金堂 エ子ノ五分間数六十五間三尺 ○鐘樓 エ亥ノ八分間数四十八間 ○鼓樓 エ子ノ二分間数四十八間

○文珠樓 エ子ノ五分間数五十二間 ○辨天 エ子ノ二分間数四十八間 ○大黒天 エ子ノ八分間数二十八間 ○嘉祥寺 エ亥ノ二分間数七十三間三尺

○講堂 エ亥ノ九分間数八十間 ○經藏 エ亥ノ三分間数五十八間五尺 ○常行堂 エ子ノ四分間数七十四間 ○法華堂 エ子ノ四分間数七十七間

○日光社 エ子ノ六分間数四十三間 ○午午觀音堂 エ子ノ七分間数四十二間 ○鈴掛森 エ子ノ三分間数二十二間 ○獨鈷水

○金雞山 エ子ノ八分間数六十五間 ○金峯山 エ子ノ九分間数五十四間 ○新熊野 エ子ノ八分間数二十二間

○義經堂 エ子ノ二分間数八間 ○大阿弥陀堂 エ子ノ七分間数二十九間 ○小阿弥陀堂 エ子ノ九分間数九間

○基衛室ノ墓 エ子ノ八分間数二十二間 ○阿弥陀堂鐘樓 エ寅ノ六分間数二十二間 ○貴船社 エ子ノ九分間数四十九間

○林九字池新御堂 エ子ノ九分間数無量光院ト号ス ○三重寶塔 エ寅ノ一分間数七十七間

○新御堂鐘樓 エ寅ノ一分間数七十七間 ○柳御所 エ子ノ九分間数八十三間 ○日吉白山社 エ子ノ九分間数四十九間

寅ノ四分
 五ノ共間 ○和泉酒 工寅ノ九分
 七ノ八間 ○伽羅樂 工寅ノ七分
 七ノ二八間
 ○舞鶴ノ池鉄塔 工寅ノ七分
 一ノ丁四ノ一
 ○車宿 工卯ノ五分
 五ノ五間 ○時ノ太鼓 工卯ノ五分
 二ノ丁五ノ一
 ○正八幡 工巳ノ六分
 二ノ五間 ○國衛屋敷 工巳ノ三分
 五ノ五間 ○隆衛屋敷 工巳ノ一分
 二ノ五間 ○兒ヶ澤 工午ノ五分
 二ノ丁五ノ一
 ○祇園社 工巳ノ七分
 一ノ丁二ノ六間
 ○王子諸社 工巳ノ六分
 一ノ丁五ノ一
 ○春日社 工午ノ九分
 六ノ丁二ノ六間
 ○勅使屋敷 工未ノ九分
 九ノ丁三ノ一
 ○藥師堂 工午ノ七分
 十ノ丁六ノ一
 ○諏訪社 工未ノ八分
 六ノ丁四ノ一
 ○鏡山伊豆権現 工未ノ三分
 二ノ丁六ノ一
 ○吉祥堂 工未ノ三分
 六ノ丁一ノ一
 ○不動堂 工未ノ一分
 七ノ丁共間
 ○西明堂 工未ノ八分
 一ノ丁一ノ一
 ○櫻清水白山社 工未ノ五分
 九ノ丁四ノ一
 ○北野天神社 工未ノ九分
 八ノ丁四ノ一
 ○慈覚堂 工未ノ九分
 八ノ丁四ノ一
 ○文珠堂 工申ノ六分
 三ノ丁二ノ一
 ○鐘樓 工申ノ四分
 一ノ丁四ノ二間
 ○鐘ヶ山嶽 工寅ノ六分
 一ノ丁四ノ二間
 ○護摩堂 工申ノ四分
 一ノ丁四ノ二間

○猫摩洲 工寅ノ三分
八ノ丁二ノ五間

右清雄カ書スル所舊蹟ノ数六十三ヶ所毛越寺ハ嘉禄二寅丙戌歳十一月八日ニ堂塔焼亡スト東鑑脱漏ニ出テ諸堂ノ礎石今ニ残レリ觀自在王院ハ天正元年二月八日ニ焼亡スト云ツケリ無量光院ハ泰衡滅亡ノ時放火ストアル一書ニ云リ愚按スルニ東鑑ニ平泉館炎上ノ後頼朝卿無量光院巡覽ノ事アリ此院ノ額廢ハ其後ノ年曆ニ係ルベシ其外ノ諸堂類廢スル物礎石ノ残レル有又ニ残モ多シ秀衡ノ居館ハ文治五年八月廿一日泰衡放火シテ奥ノ方工逃行ト東鑑ニ出タリ諸堂並ニ居館ノ跡今ハ田圃トナリ又人居トナリテ其界分明ナラズシテ不可尋得モ多シ
 摩多羅神ハ昔堂焼亡以後天神社内ニ安置シケルガ享

保年中昔ノ常行堂ノ地ニ堂建立シテ又移セリ今ノ
堂ハ昔ノ堂跡ヨリ三四間西工寄レリト云

觀自在王院大阿彌陀堂ト云リハ堂焼亡ノ後佛像ヲ他所ニ移置ケ

ルガ昔ノ堂跡ニ堂ヲ建立シ佛像ヲ安置ス

中尊寺ハ堂塔寺院建武四年丁丑悉ク焼亡ス經堂金

色堂ノ二字ハ火災ノ難ヲ遁レテ残レリ其後堂社ヲ營

ト錐氏昔羊カバニ不足然ニ此地ノ堂社寺院其地相隔々サルガ

故ニ方角間町ヲ不及記又山下ニ義經ノ家臣等ガ舊跡

有ト錐トモ相隔サルガ故是亦記スルニ不及

○平泉所々清泉二十八

一按察使清水 勅使按察使中納言顯隆卿下向ノ時用ル

水ナリ故ニ按察使清水ト云中尊寺寺内ニ在リ

一破フリハリニミツ似泉 金雞山ノ下ニ在昔此水ニ似ヲ浸スニ水ノ寒冷ニ依テ

似破裂スルガ故ニ名付シトゾ

一鑿キリトラシ通清水 圓隆寺跡ノ後ニ在リ獨鈷水ト号ス慈覺大師

加持水ナリト云

一櫻清水 鏡山ノ下ニ在リ昔清水ノ辺ニ櫻ノ並木有故ニ名付今

櫻残レル有リ

一酒ノ泉 平泉館跡ノ南ニ在リ今海道ノ東也昔三代ノ時酒泉

ノ涌出シ所也ト云其趾今ニ在リ

愚按スルニ醴泉ノ其味ヲ称シテ斯名付タルヤ漢ノ地理志酒

泉郡有城下有金泉味如酒ト云リ又日本養老瀑布ノ事

實有是等ノ類ナルヤ再按スルニ此所平地ニシテ此泉有

リ此郷ヲ平泉ト号セシハ是ニモトツケルカ○秀乃衡ガ三男和

泉三郎忠衡が宅泉屋ノ東ニ在ト東鑑ニ云リ其所今何
レノ地ナル事ヲ知ラズ此辺ノ事ナルニヤ

○赤堂跡 二十九

堂跡中尊坂ノ上リ口道ヲ隔テ下ニ在リ此堂ノ本尊丈六ノ弥
陀藥師昔堂額廢ノ後山上金色堂ノ内縁ニ移シ置ケルガ
室曆九年金色堂ノ東經堂南ニ當リ堂ヲ建立シ同年八月
朔日本尊ヲ移安置ス

愚按スルニ赤ハ關迦ノ字ナルベシ關迦ハ水ノ梵語ナリ昔堂塔
寺院全盛ノ時禪房三百其外山上山下人家多キ時此地ニ
大キナル井ヲ掘リ其水ヲ山上山下ニ汲用タル故ニ關迦堂ト名
シヤ今地足ヲ添ルノ笑ヲ不顧シテ書之事爾

○圓隆寺焼亡 三十

東鑑脱漏曰嘉祿二年丙戌十一月八日己未陸奥國平泉丹隆
寺燒亡于時有此災之由告廻鎌倉中者有之可謂不思議
然後日所風聞彼時刻也且藤原清衡建立精舎也靈場於
莊嚴者吾朝無双右大將軍文治五年奥州征伐之次令煩禮
給之後殊有信仰云

愚按スルニ丹ノ字ハ圓ノ字ノ傳寫ノ誤ナリ藤原清衡ハ中尊寺
ヲ建立ス圓隆寺等ヲ建立スルト云ハ誤ナリ其子基衡ハ毛
越寺ニ於テ諸堂ヲ創立ス金堂ヲ圓隆寺ト号ス嘉祥寺ハ
基衡未其功ヲ不終シテ卒去ス故ニ承衡父ガ志ヲ繼テ
其功ヲ終フ又燒亡ノ日其事ヲ鎌倉中ニ告廻ラス者有ト
云ヘルハ不思議ナリ世ニ所謂天狗ノ所爲歟可知也

○北上河衣河館 三十一

廿四

北上河ハ昔地圖ヲ見^{侍リシ}ニ伊沢郡堺上ヨリ東山ノ山際ヲ南方工
齋^ニ流レシナリ又衣河館ハ天和年中ノ頃カ高^サ五十間東西百間餘
南北廿一間餘一説ニ東西四百六十間餘
南北百三十間餘ト云リト云リ此時衣川ハ此館ノ際ヲ
廻リ流レテ北上川ニ入ル○秀衡ノ時西行法師平泉ニ來リテ
衣川館ヲ見テヨメル

十月十二日お泉あ海つ重つちこ重ルもあ雪降嵐
ちけししくことのかりあ河さこりル里りり
衣川見ぬあかしくそまう重むつひく見ル河乃
あまのりさそ衣川の株志あわしたるさとか
あうのあましく物成るらん地志あまう河氷
さうの口けさじしれハ西行法師
山家集
と重つちかそらんも志さそらんそりさる衣川見ぬああはる

松迺河と衣川事と 衣川陸奥

衣川河ハあまうさる立派ハ岸の松ノ手はああうり
此歌ヲ以見ル時ハ衣川ハ昔ヨリ館ノ際ヲ廻リ流レテ北上河ニ入リ
○愚按ニ北上川天和ノ頃ヨリ漸々ト洪水ニテ數百間西ニ流ル又衣
川ハ中尊寺ノ下ヨリ數十間東ニ流レテ北上川ニ落ツ西川一ツニ
ナリテ今ハ衣川館ノ下ヲ廻リ流レテ東南ノ方ニ流レ下ル館ハ
ビ名ノ洪水ニ崩レカケテ上ハ昔ノ年ニモタラス甚ダセバ館ノ上西ノ
方ニ義經堂有既ニ前ニ詳ニ
是ヲ書ス天和三年河東田氏太守公ニ告テ
造立ノ時瓦甚^キ目ナリシガ今安永九年庚子ニ至テ九十八年ニシテ
堂零落シテ同年再興セリ堂中ニ安スル所ノ義經ノ木像ハ宝曆
年中ノ建立ナリ義經堂ノ西ノ高キ所ニ亭ノ跡アリトモ云ベキ所
有東ニ後世新山推現ノ社ヲ建ツ此里ノ鎮守ナルニヨツテナリ又館ノ

少シ下ニ馬乘馬場トモ云ベキ所
 有此館ノ間昔ハ西方ニ在ケルニヤ南方
 三在ケルニヤ分明ナラズ義經ノ家臣亀井鈴木増尾等ノ舊跡館
 ノ西ニ在リ討死ノ所ナルベシト云又世俗ニ辨慶立往生ノ所ト云ハ衣
 川ヨリ北上ニ流レラツル所ニアリ今ハ淵瀬時々變ルニヨツテ其所昔
 ニ違エル十九ベシ衣川館モ昔ニ甚異ナリ故ニ後ノ人ニ知ラセシタメニ
 是ヲ書ス亦後世ニ至リテ今ノ時ニモ變ルル事有ベシ○此館ニ民部
 ノ少輔基成ヲ住セシメシ事又源義經ヲモ住セシメシ事予平泉實
 記ニ詳ニ記ス○此館ヲ世俗ニ高館トモ云イ判官館トモ云○此館
 西ノ方海道ノ少シ上ノ山ヨリ錢ヲ掘出セシ事有リ元禄年中
 ノ事ニヤ其頃停止シテ今ハ掘ラセズ
 終

平泉雜記卷之五

相原友直著述目錄

- 問窓雜纂 一冊 寶曆荒年錄 一冊
- 平泉實記 五卷 板行 仙臺領名所記 一冊
- 平泉雜記 五卷 秘法集 二卷
- 平泉舊蹟志 一冊 方法抜粹 一冊
- 氣泉風土州 三卷 壺碑考 一冊
- 醫談資 三卷 南宗房物語 一冊
- 松島巡覽記 一冊 塩竈巡覽記 一冊

